

## 鶴見俊輔の社交資本 (中間報告)

—— 鶴見俊輔試論：ある知的マゾヒズムの軌跡 (Ⅱ) ——

原 田 達

### Social Capital of Shunsuke Tsurumi (An Interim Report)

—— An Essay on the Cultural and Social Theory of Shunsuke Tsurumi :  
A Locus of Intellectual Masochism (Ⅱ) ——

Tohru HARADA

#### 要 約

鶴見俊輔はめぐまれた社交資本を相続した。この資本がその後のかれの人生におおきな影響をあたえる。以下の論考では、社交資本概念を四つに分類し、鶴見の人生軌跡にあわせて社交資本の関与過程をあきらかにしようとした。四分類のうち最初のふたつは鶴見俊輔という知識人の育成過程に関与する社交資本であるが、これについてとりわけくわしく論じたのは、鶴見が育った社会環境を「文化的支配階級」として位置づけ、この階級の姿を鶴見という人物をとおして透かし見ようとしたからである。

と同時に、この論考は、近代化する日本の社会構造についてひとつの見取り図を提供しようとする試みでもある。私見によれば、近代化する日本は四段階に整理できる。鶴見俊輔は第二、第三段階の日本の近代化に文化的、思想的におおきな影響をあたえた人物であった。

ただし、以下の論考は完成されたものではない。あくまでこれは、上記の試みのための中間報告にすぎない。

キーワード：鶴見俊輔, 社交資本, 近代化, 文化的支配階級

## はじめに、もしくは仮説と目的

この章は鶴見俊輔の社交資本<sup>1)</sup>について論じようとするが、ここにはひとつの目論見とひとつの仮説が下敷きになっている。

目論見とは、日本を代表する戦後知識人の人生軌跡を社交資本概念をつかって分析することによって、この概念の有用性をしめすことである。だが、そのためには社交資本概念そのものをさらにくわしく分類することが必要となる。私はここで社交資本の一般理論まで提示する余裕はないけれども、しかし、この概念の具体的な応用にさいしてはいくつかの準備作業が必要だと思われる。以下では社交資本を「賦与された社交資本」、「機会としての社交資本」、「形成する社交資本」、「賦与する社交資本」という四つに分類しているが、それは、このような分類によって特定の人物の人生軌跡を時系列にそって分析することが可能になるからである。

つぎに、下敷きにされた仮説とは、日本近代化にかんする仮説である。鶴見俊輔の社交資本をここで取り上げるのは、むしろこの人物の思想と行動の総体に迫りたい（つまり、鶴見俊輔論の一部を構成したい）からなのだが、しかしそれだけではない。私は鶴見俊輔という人物を近代日本におけるある社会層の象徴的存在として考えている。この社会層とは、近代的な文化的支配階層（cultural dominant class）のことである。つまり、近代化する社会の原動力として機能した社会層のことである。この社会層は近代日本において、いつ、いかにして成立し、再生産され、維持されたか、とりわけその再生産のメカニズムはどのようなものであったか、これを鶴見俊輔を例にして、間接的にはあるが、しめしたい。こういう問題意識からみれば、じつは鶴見俊輔とは分析のための一素材である。繰り返して言えば、日本近代化の推進力は鶴見が属していた文化的支配階級にあったというのが、私の作業仮説である。

この目論見と仮説にかんして、もうすこし詳しくコメントしておこう。まず、社交資本について。

ある人物の人生軌跡を社交資本を視点にして分析しようとするれば、その人物の成長にともなって社交資本の質が変化することが容易に想像できる。かれが幼いときに所有できる社交資本においては、その家族成員がかれに与えた社交資本がおおきな位置を占めるのは当然のことである。父に連れられて父の友人に会う。その人が著名な人物であったばあい、かれが手にいれた社交資本は、ほとんど父から相続したものだと考えてもいいだろう。このように、幼いときに人が手に

---

1) 「社交資本」概念については、Bourdieu, P., *Le capital social : notes provisoires*. in *Actes de la recherche en sciences sociales*, No. 31, 1980, pp. 2-3 (福井憲彦訳「〈社会資本〉とは何か：暫定的ノート」、『actes』, No. 1. 1986. 30-36頁)を参照せよ。ただし、以下では「capital social」の訳語として一貫して「社交資本」をあてた。

する社交資本は家族の社交資本に規定されることになる。そのような社交資本のことを、ここでは「賦与された（もしくは、相続された）社交資本」と呼びたい。鶴見の「賦与された社交資本」がきわめて大きなものであったことは、容易に想像できる。と同時に、この種の社交資本に焦点をあてれば、明治、大正、昭和初期にこの国に成立していた「上層」社会の社交ネットワークの構造や文化資本の社会的構成も明らかにすることができる<sup>2)</sup>。

この「賦与された社交資本」と連続していながら、しかし別の概念を立てた方がいいと思われる社交資本がある。たとえば、学校で子どもが手にいれるような社交資本は、それは偶然の出会いのように見えて、しかし、もしこの学校が特定の社会層の子どもたちが進学するような学校であったら、その出会いはけっして偶然の産物ではない。そのような学校への進学は親や家族の経済資本や文化資本、または社交資本などがその子どもの社会的機会を開いたわけであり、たしかにそこには親や家族の便宜の供与がある。だが、その「社会的機会」のなかで具体的にどのような人物と出会うかは、偶然の産物である。したがって、このようにして子どもが手にいれる社交資本を単に「相続される」と考えることはできない。そこで、このような社交資本のことを「機会としての社交資本」と呼んでおこう。

もちろん、この社交資本は「賦与される社交資本」と密接な関係がある。のちに述べるように、鶴見のアメリカ留学に関して、父祐輔の関与は大きいものであり、これがなければ留学は不可能であった。鶴見が「相続した」社交資本がアメリカ留学におおきな社会的便宜を供した。この意味で、鶴見にとってアメリカ留学という「機会」、アメリカでさまざまな人物と出会う「機会」に「賦与された社交資本」が影響したことは事実だけれども、しかし、留学それじたいは「相続」されるものではない。したがって、その連続性を認めつつ、ここでは別の「機会としての社交資本」という概念を立てておくことが有益である。

だが、「賦与される社交資本」にせよ、「機会としての社交資本」にせよ、それが社交資本になるかどうか、また社交資本として有効性を維持できるかどうかは、いかにして当人がそれを有効

---

2) 以下の論考には限界があることを最初に述べておきたい。ここでは鶴見を中心に論じるわけだが、鶴見はたしかに私が想定している「文化的支配階級」の中核部分に育った人物ではあるけれども、かれをもって日本近代化の唯一の、代表的事例とすることはできない。近代化の過程全体を見通すためには、おおくの事例研究の蓄積が必要となることは言うまでもない。これが第一の限界である。このような限界があることを前提にして言えば、以下の論考は文化的支配階級の変化を鶴見の社交資本の構造をとおして「透かし見る」試みにすぎない。

第二の限界は、以下で述べる鶴見の社交資本は、基本的に鶴見じしんがその作品のなかで語った人物に限定されていることである。鶴見が語らなかった人物についての言及はわずかしかない。これがおおきな限界であることはじゅうぶん承知している。だが、およそ他者の社会関係について包括的に捉えることはできないものである。いかほどの欠落が、このような研究にはさけがたい。今後さらに鶴見の社交資本の実態については調べることが必要であろう。したがって、ここで報告される鶴見の人的ネットワークはあくまで中間報告でしかない。

な社交資本に転化できるかという、かれじしんの知性、社交性、人格などにかかっている。才能もなく留学したところで、また、どれほど上質の社会的ネットワークを両親が子どもに与えたところで、当人に知性や人格、社交性などがなければ留学という機会やそこでの人びととの出会いを社会的資本にまで高めることはできないであろう。つまり「機会としての社交資本」であってもそれが社交資本に転化するかどうかは、当人の才能、人格にかかっており、いわばそれはいかほどか形成されるものなのだ。したがって、ここで社交資本の第三の類型を設定する必要がある。当人の才能、人格によって「形成する」社交資本のことを、ここでは「形成する社交資本」と呼んでおきたい。もちろん、この「形成する社交資本」とは、当人だけの才能、人格に係わるわけではない。社会関係はたえず相互行為なのであるから、出会った人物の才能、人格が不適切なものであれば、良好な社交資本は形成されない。概念的に「機会としての社交資本」と「形成する社交資本」とは分離されるけれども、これらの資本のあいだに密接な関係があることも忘れてはいけないだろう。

ところで、「賦与される社交資本」、「機会としての社交資本」においても、どのような人物と出会うかという偶然の要因はおおきいけれども、しかし「上層」社会の社交資本の構造を考察するばあいには、「賦与される社交資本」→「機会としての社交資本」→「形成する社交資本」となるにしたがって、偶然性の介在する余地がおおきくなると想定してもいいだろう。さらにまた、この順にしたがって当人の判断、主観性、意志がおおきな決定因になることになる。社会的決定と個人の意志の作用関係、つまり社会的に「つくりだされ」、「つくりだす」メカニズムは、この社交資本の類型にもそのままあてはまる。

そして、最後に、他者に「賦与する社交資本」がある。その人物が高名となり社会的地位を登ることによって、今度はかれが他者に社交資本を与える。いいかえれば、かれと「交友がある」という事実が他者に社会的便宜を供するようになるのである。鶴見のばあいも、戦後を代表する知識人として、哲学者として、社会学者として、また雑誌の編集者として、その社会的地位を獲得するにつれて、かれとの社交資本をおおくの人びとに与えることになった。この「賦与する社交資本」は相続される「賦与された社交資本」として機能することもあるけれども（つまり、長男太郎氏にたいしてだけは）、しかしおおくの場合は相続関係とは切れている。それは他者にとって「機会としての社交資本」になるか、もしくは「形成する社交資本」として手にいれられるだろう。

以上、社交資本の類型について簡単にまとめておいた。そして、つぎは日本の近代化についてのラフな仮説である。

私は明治維新後の日本社会について四つの時代区分が可能ではないかという仮説をもっている。日本が近代化するこの時代は、つぎの四つの時代に区分できるのではないか。ただしこの区分は、社会の文化的支配階級がいかにして作られ、維持されるかという視点からの区分であり、産業構造や政治構造、社会意識の構造などの変化にまでこの四つの区分を適用するつもりは、今のとこ

ろは、ない。以下の時代区分には、このような限定があることを断っておきたい。

第Ⅰ期：明治維新（1868年）から日露戦争（1904年）まで

第Ⅱ期：日露戦争から高度経済成長期（1960年代）まで

第Ⅲ期：高度経済成長期からバブル期（1980年代後半）まで

第Ⅳ期：バブル崩壊以降

第Ⅰ期は日本が近代化にむけて離陸しようとする時期である。いまだ封建制のシステムをつよく残存させながら、しかし新しい社会的・政治的勢力が台頭する時期である。時代の転換期であり、したがって社会的流動性もたかく、有為な人材も多数輩出した。有為な人材のおおくは、その社会的進出の原資を西洋的知識、科学と技術にもとめた。近代国家として自立しようとする日本にとって、このような知識と能力の所有者こそが必要であった。政治、法律から産業、教育、医療、保健、衛生、軍事などの各分野において西洋近代によるスクラップ・アンド・ビルドが進行する。鶴見との関連でいえば、祖父後藤新平が社会的上昇のきっかけをつかむのもこの時期である。

第Ⅱ期は、近代日本の基本的社会構造が完成し、再生産される時期にあたる。産業構造だけでなく、社会階層の構造もこの時期に完成し、再生産されるようになる。東京大学が社会的階梯をのぼる最短かつ最良の手段となり、鶴見祐輔が社会的地位をつかむのはこのような社会構造に順応したからであった。

日露戦争頃に完成された文化的支配階級の構造は、第二次大戦によってでも基本的に崩れなかったのではないかと、私はそのように考えている。たしかに一時期、財閥は解体され、大戦時の政治家も追放された。農地解放がなされ、教育システムも変革された。これまで歴史学においては、第二次大戦を重要なメルクマールとして歴史区分をする方法が有力であったが、しかし、冷静に考えてみれば、大戦中の政治家が復活し、かれらは戦後政治においても重大な意志決定をおこなった<sup>3)</sup>、明治以降の財閥さえ復活している。さらに、教育システムが変化したといっても、東京大学を頂点とする学歴と出世の位階制構造はまったく変化しなかった。文化的支配階級は二度の「転向」、つまり大政翼賛運動への転向と民主主義への転向をへながら、みずからの階級を再生産しつづけたのではなかったか。戦後知識人の系譜をながめても、かれらのおおくは戦前の知的階級の子弟がおおく、階層的連続性がたかい。鶴見俊輔とはまさにそのような階層の出身であった。

3) 典型的には岸 信介がいる。鶴見の遠縁（後藤新平の甥）にあたる椎名悦三郎は満州国実務部で当時実務部次官であった岸と知遇をえ、のちに岸が商工相のときに商工次官となった。戦後に公職追放となったが、かれもまた自民党の有力者として復活する。

文化資本や学歴資本が社会的チャンスの重要な要件として安定的に、閉鎖的に社会構造を再生産しつづけたのは、この日露戦争から高度経済成長期までの日本だったのではなかっただろうか。しかし、これは当然のことであって、高度経済成長までの日本は大学進学率はひくく、学歴取得による社会進出というメカニズムが大規模に稼働しはじめるのは高度経済成長期をへて以降のことである。

その第Ⅲ期において、第二次世界大戦によっても崩れなかった文化的支配階級の構造が崩れはじめる。それは急速な大学進学率の上昇によってもたらされた。少数の上層支配階級の再生産のメカニズムは上方への社会移動メカニズムの大規模な展開によってかき消されてしまう、これが高度経済成長の歴史的・文化的意味だったのではなかったか。日露戦争頃に成立した、薄く、成立基盤の脆弱な日本の文化的支配階級は、この時期、下から大量に進出してきた勃興する新興文化ブルジョアジーによって浸食される。高度経済成長は、明治維新から日露戦争までの日本社会で展開したきわめて流動性のたかい社会を再来させたとも考えられる。

そして第Ⅳ期は、このような高い社会的上方移動のメカニズムが終焉する時期である。バブル期とは高度経済成長の掉尾を飾るアダ花であったのかもしれない。いずれにしても、これからの時代、下からの社会的進出はかなり困難なものになるだろう。しかし、それがどの程度のものなのか、その姿はいまだにはっきりとは見えない、日本の現代はそのような状態にある。

以上が、近代日本の構造を文化的支配階級に視点をあてて区分した、ラフなスケッチである。そして、このラフ・スケッチを下敷きにして、以下の鶴見俊輔の社交資本論が述べられる。それは、鶴見俊輔を近代日本の第Ⅱ期を代表する文化的支配階級のケース・スタディとするためである。この時期、日本にはどのような文化的支配階級が存在し、かれらの間にはどのような社会的ネットワークが展開していたのか、この問題について鶴見俊輔をひとつの例として描き出してみたい、これが以下の論考の目的である。

もちろん、論考の主たる目的は鶴見の社交資本の構造を描き出すことであり、それを通して社交資本の概念的調琢がすこしでも進めばいいと思う。しかし同時に、以下の論考が、以上に述べたような歴史的展望のもとに構想されているということも述べておきたいと思う。

## 賦与された社交資本

後藤新平が所有した社交資本のすべてを確定することはむづかしい。明治後期から大正にかけて日本の近代化・植民地化を推進した中心人物が所有した社交資本は膨大な量と質をもつものであり、それを調べるだけで大部な報告書が必要となるだろう。これは、鶴見祐輔についても同様である。

だが、鶴見俊輔の社交資本の相続を考えるばあい、後藤新平や鶴見祐輔の社交資本の総体は副次的な意味しかもたない。というのは、いっばんに人が尊属から継承した社交資本は、その人が

人生の曲がり角や困難に遭遇したときに効力を発揮するものであり、まさにそのような性格をもっている社交的資財のことを社交資本と呼ぶのであるから、鶴見の社交資本の相続にかんしては、鶴見がそれによっていかなる便宜を手にしたかという相続者の視点から考察されるべきであろう。したがって、後藤や鶴見祐輔の社交資本の総体は副次的で基礎的な資料として利用されることがのぞましい。

とはいえ、後藤新平や鶴見祐輔のような人物を祖父として、父としてもった人物は、家庭内の日常的なコミュニケーションのなかで政治の動向や歴史の動き、また出版界や文学界の現状や大学（これは東京大学と考えてもいい）の世界を身近な物語として理解したということは容易に想像できる。張作霖の死亡は日本軍の陰謀にちがいないと政治家の父が語るリアリティを当時の日本の子どものどれだけが手にすることができたであろうか。震災後の東京を再建する責任者がおなじ家庭のなかで生活している環境に育った子どもは、鶴見のほかには姉和子しかいない。また白樺派の文学者が祖父や父の知人として登場する環境に育った子どもは、活字によってはじめてかれらと出会うことができる子どもにくらべて、白樺派とその文学をもっと身近に感じる<sup>4)</sup>ことができたであろう。

いま述べたことは社交資本という概念ではなく、むしろ文化資本という概念によって把握されるべき社会現象ではある。しかし、ここに社交資本と文化資本の混淆を見ることもできるだろう。この場合、文化資本が文化資本としてのみ成立する家庭と文化資本が社交資本と一体となって成立する家庭とでは、後者のほうがより「高級」でエスタブリッシュされた社会に属していると考えられる。鶴見はそのような家庭に育ったのだった。

さて、だから、後藤新平と鶴見祐輔の社交資本の総体については、ここでは述べない。以下では鶴見俊輔が出会った、祖父と父の社交資本について言及するにとどめたい。

まず、鶴見の血族関係、つまり父祐輔の出自と母（後藤）愛子についてまず簡単にまとめておきたい。父祐輔はまずしい家庭に育ち、知の資本を武器にして高級官僚に駆け上がった人物だと言われる。それはそうなのだが、しかしかれはもともと由緒ある家系の出身だった。祐輔の父は鶴見良憲という。良憲は、水谷勝得という旗本につかえる代官の跡継ぎで、維新後、武士の身分

---

4) こういう事実をあげておこう。岩永裕吉という人物がいる。かれは満州鉄道から鉄道院にはいり、のちに同盟通信社をつくった。したがって岩永は鶴見祐輔の鉄道院の後輩にあたるのだが、かれは長与専斎の四男であった。ということは、岩永は後藤新平を内務省衛生局に招いた人物の息子ということになる。そして岩永の末弟が白樺派の長与善郎なのである。このような人間関係の錯綜は、それだけ鶴見をとりまく社交的環境が密接であり、そこに濃厚な人的ネットワークが存在していたことをしめしている。そして、この人的ネットワークはたんに官僚や産業の世界だけに根を張っていたのではなく、文化（文学）の世界にもおよんでいたことを記憶しておきたい。白樺派は鶴見にとって活字によってのぞき見ることができる世界だったのではなく、なによりも父や祖父の人間関係のなかで語られる、そのような世界だったのである。

を捨てて実業界に進出しようとし、じじいつくつかの工場を経営して成功せず、貧しく死んだ。祐輔がまずしい家庭に育ったというのは事実ではあるけれども、しかしこの事実は祐輔が下層階級の出身だということの意味しない。ちなみに良憲は祐輔の下にさらに男の子をもうけたが、これが鶴見憲であり、この憲の息子が鶴見良行である。周知のことであるが、鶴見良行は鶴見俊輔の従兄弟にあたる。

良憲の父（祐輔の祖父）は鶴見良造良直という。岡山県備中布賀（黒鳥）にあった黒鳥陣屋の最後の代官である。さらにその直系尊属には鶴見内蔵助という人物がいる。この人物は仕えていた水谷藩のお城没収の際に、これを受け取りにきた浅野藩名代の大石内蔵助と交渉する人物である。このような歴史をみれば、鶴見家はもともと岡山備中の地方名望家の家系であったと理解すべきだろう。<sup>5)</sup>

ただ、父祐輔につながるこの家系とその社交ネットワークは鶴見の人生にはほとんど影響を与えていない。というのも、鶴見が岡山県備中市を訪れたのは1979年、鶴見が57歳の時であり、当時そこに住んでいた鶴見の遠縁とその時はじめて会っているからである。ここでは鶴見の父方の祖先が地方名望家に属する家系であったことを確認しておくだけでいい。

しかし、父祐輔じしんが切り開いた社交資本が鶴見にあたえた影響はつよい。たとえば鶴見と石本新との関係は祐輔の人的ネットワークからもたらされた。石本新とは、加藤シズエが先夫である男爵石本恵吉とのあいだにもうけた長男である。石本恵吉は東大時代に新渡戸稲造に師事しており、祐輔とは兄弟弟子にあたる。この大学時代の祐輔の社交資本がそれぞれの息子どうしをひきあわせる。

だが、鶴見と石本新との関係はたんなる幼友達という域を越えている。というのは、石本は鶴見が中学校を二年でやめ、家に引きこもっているときにクロボトキンを読むことすめ、戸坂潤の『日本イデオロギー論』を紹介し、鶴見にプラグマティズムとの出会いをうながしたのも石本だったからである。クロボトキン、プラグマティズムといえば、その後の鶴見の知的生活の基本線となるものである。そういう知的養分をもたらしたのが石本新であった。石本新じしん、のちに記号論理学者となっている。またかれは『思想の科学』の同人ともなった。

ここには「上質」の社交資本が豊かな文化資本に転化するメカニズムがある。鶴見の生活環境は、社交資本が経済資本に転化するような典型的な経済ブルジョアジーのそれではなく、典型的な文化ブルジョアジーのそれであったことが、この事実からもよく解るだろう。子爵後藤新平、

5) 「絵葉書の余白に」(TSS, 11, 1984, 516頁以下) 参照。なお、鶴見俊輔の作品からの引用・参照は、二種類の著作集(『鶴見俊輔著作集1～5』、『鶴見俊輔集1～12』、ともに筑摩書房)、および対談集(『鶴見俊輔座談』、全10巻、晶文社)に収められているものについては、これらによった。その際、『鶴見俊輔著作集』はTSC、『鶴見俊輔集』はTSS、『鶴見俊輔座談』はTSZと略記して区別した。略号につづいて、巻・発表年・頁を記したが、発表年については初出の年である。

男爵石本恵吉、俊英鶴見祐輔、東大法学部、新渡戸稲造、こういうネットワークのもとで石本新と鶴見はクロボトキンやプラグマティズムについて語るのである。ここに、ほぼ完成された近代日本の社会構造（文化資本、社交資本の構造もふくめて）が再生産にむけて稼働しはじめていた兆候をみて取ることは不可能ではないと思う。また、それがたとえ薄いものであったとしても、近代日本において文化ブルジョアジーとでも呼びうる社会階層が成立しはじめていたことをみて取ることさえ可能だろう。

新渡戸稲造を媒介として息子どうしが出会うというパターンは、ほかに鶴見と矢内原伊作の関係がある。矢内原の父は東大校長をつとめた矢内原忠雄であるが、かれは東大法学部時代に新渡戸のつよい影響をうけている。かれは鶴見祐輔の弟弟子にあたるのだが、その息子伊作は京都大学文学部で哲学をまなび、カミュやサルトルを日本に紹介したフランス哲学研究者である。1961年、鶴見が同志社大学に勤務するようになって、かれらは出会っている。

ただ、鶴見と矢内原伊作との関係は鶴見と石本新との関係ほどに鶴見にとっては重要なものではなかったようだ。これは、その出会ったときの年齢のちがいがおおきな原因だと思われる。知的な刺激にしろ何にしろ、人の人生に影響を与えるような刺激は幼いころの方が圧倒的につよいものだ。しかし、学歴資本の頂点に位置する東大法学部を媒介にして、この資本をもつ人間の息子たちが同じ大学で同僚となるという事実は、この国の近代に知的資本の再生産のメカニズムが機能していたことを物語るものとして記憶しておくべきだろう。

ところで、母愛子の社交資本の方はどうか。むろんそれは祖父後藤新平の社交資本を語ることになるのだが、しかし、先にも述べたように後藤の社交資本の総体についてはここでは述べない。また、後藤の社会的活動については、すでに前章に述べておいた。<sup>6)</sup>ここでは、愛子の甥たちについてだけ述べておこう

愛子の甥は俊輔の従兄弟にあたる。愛子には静子という姉がいたが、この静子が嫁いだのが佐野家であった。静子はふたりの男児をもうける。それが佐野碩と新である。弟の新は鶴見の「不良」時代の悪友であったが、佐野碩はもっとおおきな意味をもっている。かれは東大法学部に入学し、東大新人会のメンバーとなる。東大は中退することになるが、左翼演劇の活動家として活躍し、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）の書記長をつとめた。現在ではあまり歌われなくなった「インターナショナル」は佐野碩と佐々木孝丸が共同で訳詞したものである。佐野碩はのちにソ連に渡るが、スターリンの粛正にあり、国外追放となる。メキシコに政治亡命し、この地で演劇活動をつづけ、「メキシコ演劇の栄光の時代」をつくり、死んだ。

6) 拙稿「鶴見俊輔試論：ある知的マゾヒズムの軌跡(1)」、『追手門学院大学人間学部紀要』、第3号、1996)が第一章となる。この論文は「ある知的マゾヒズムの軌跡」という統一したタイトルのもとに連作される第二章にあたる。序章にあたるのが、拙稿「荷風から：下降と「人びと」の構成」(『追手門学院大学創立三十周年記念論集』、1997)である。

佐野碩は1931（昭和6）年、鶴見が9歳の時にソ連に渡っているから、鶴見とのあいだに直接的な交流はなかった。だから碩からの影響も直接的にはない。しかし、そのような人物がいることを鶴見はつねに意識していたようである。鶴見は父祐輔の政治的軌跡を（とりわけその転向の姿を）はずかしい思いをもちながら眺めつづけ、だからこそ「翼賛体制の設計者」<sup>7)</sup>などは父祐輔を素材にすればより細部にいたるまで描けたものを、あえて友人永井道雄の父永井柳太郎を素材に選ぶほど唾棄すべきものと感じていたはずなのだが、しかし、おなじ親族のなかに父とは対極に位置する碩のような人物がいるという事実は鶴見のところに均衡をうみだしたかもしれない。その証拠に、鶴見がのちに描くことになる佐野碩の姿はうつくしく陰影に富んでいる。鶴見の『ゲアダルレーベの聖母』<sup>8)</sup>は佐野碩への鎮魂歌として読むことも可能だろう。

この事実は社交資本の一般理論について、ある示唆をあたえる。つまり、社交資本は、なにも直接に会い、影響され、便宜を供されなくとも機能するということだ。その人と私はつながっているという確信はかれの人格（アイデンティティ）におおきな影響をあたえるだろうし、また本人の行動を規定することにもなるだろう。このような社交資本のことを主観的社交資本と呼んでもいい。また、第三者は、ある人物（鶴見）がその人物（佐野碩）と密接につながっていると認知することによってかれ（鶴見）にその人物（佐野）が手にした第三者との社会的関係をかれ（鶴見）に社交資本として賦与することがある。じじつ、鶴見はメキシコで佐野につながる人物として認知されたのだった。このような社交資本のことを二次的社交資本と呼ぶことができるかもしれない。

また、佐野碩という人物の存在は、鶴見が属した一族が文化資本の豊かな（これと関連して、「政治資本」とでも呼びたい社会的資本も豊かな）社会階層に属していたことを証明している。この時代、そのような社会階層がこの国にはたしかに存在したように見える。ついでながら、こういう事実をつけ加えておこう。佐野碩の叔父が佐野学であった。

ところで、さきに、社交資本とは、人が人生の曲がり角や困難に遭遇したときに効力を発揮するものである、と述べておいた。この視点からみれば、アメリカ留学ほど鶴見の社交資本の豊かさをしめすものはないだろう。そこで、アメリカ留学に焦点をあてて考えてみよう。

あきらかに、鶴見のアメリカ留学は父祐輔の社交資本なくしては不可能だった。たとえば、鶴見の身元引受人となったのはハーヴァード大学の歴史学教授 A. シュレジンガーであったが、これは父祐輔の依頼によるものだった。当時、祐輔は対米ロビー活動に従事しており、この関係でシュレジンガーと知りあう。かれらの個人的関係はふかまり、たがいの自宅を訪問するまでになっていた。鶴見のアメリカ留学は1938年にはじまるのだが、それ以前にシュレジンガーは東京の鶴見の自宅を訪れていたし、また鶴見じしんも1937年に短期間シュレジンガーの自宅に滞

7) 『共同研究 転向』(TSS, 4, 1962)において鶴見が担当した章である。

8) 『ゲアダルレーベの聖母』(TSS, 11, 1976)

在している。

シュレジンガーが鶴見にあたえた便宜はたんに身元引受人だけではない。鶴見が入学することになるマサチューセッツ州コンコードのミドルセックス・スクールの校長にわたりをつけ、特待生として入学するよう手はずをととのえたのもシュレジンガー<sup>9)</sup>だったし、のちに鶴見がFBIに逮捕されたとき、公聴会で特別弁護人をひきうけたのもシュレジンガーだった。

もちろん、鶴見の身元引受人がハーヴァード大学の教授であったからといって、鶴見のハーヴァード大学入学に便宜がはかられたなどとは考えられない。社交資本にはおのずから限界があり、それは社会の公的ルールや競争の原理、社会的倫理などを容易にこえることはできない。もちろん与えられた社交資本だけで人生を生きのびるような人もいないわけではないだろうが、しかし鶴見はそういう人物ではなかった。アメリカ時代の鶴見ははげしく勉強し、その個人的資本、すなわち知の資本をみずからの力で蓄積していったのである。この知の資本によって鶴見じしんが切り開くことができる社交資本もできあがる。ハーヴァード時代のクワインやペリーらとの関係は、この種の資本であった。したがって、アメリカでかれが獲得したものの大部分はかれの個人的努力の成果だとみなさなければならないだろう。しかし、アメリカとの出会いがシュレジンガーとともに始まったという事実は、鶴見ののちの人生に社交資本の自己増殖とでもいうべき過程をもたらしたことも忘れてはならない。この自己増殖過程はA. シュレジンガーの息子A. シュレジンガー・Jr. と鶴見との関係のなかに見ることができる。

A. シュレジンガー・Jr. は鶴見より五歳年長であり、ハーヴァードの先輩にあたる。かれは父シュレジンガーと同じく歴史学を専攻し、卒業論文「Orestes A. Brownson: A Pilgrim's Progress」(1939)で高い評価をえ、1945年には*The Age of Jackson*でピュリツァー賞を受賞している。第二次大戦中には戦時情報局、戦略情報局などに勤務し、その後ハーバー大学で教鞭に立つことになるが、ケネディ大統領の補佐官をつとめ、その進歩的立場で知られた人物である。鶴見がシュレジンガー・Jr. と個人的親交をむすぶのは、父シュレジンガーとの関係があったからであり、この関係の背後には父祐輔の社交資本が存在したことも忘れてはならないだろう。社交資本は本人が意識して切断しないかぎり、自己増殖してゆくものなのだ。鶴見はシュレジンガー・Jr. が来日したとき会っている。

ところで、父祐輔は、いま風に言えば、いささか過保護ぎみの父親のように見える。いや、祐輔を過保護ぎみと評価するのは正しくないかもしれない。むしろ、鶴見は父親に過剰な心配をさせるほどの子どもであったと解釈するほうが正しいのかもしれない。というのは、こういうエピソードが残っているからだ。

9) Cf., Olson, L., *Ambivalent Moderns: Portraits of Japanese Cultural Identity*, Roman & Littlefield., 1992, p. 118.

鶴見がハーヴァード時代に下宿していたのは、キャンパスにも近いヤング家であった。鶴見がヤング家に下宿することになる経緯について、鶴見じしんはこう語っている。

「(ミドルセックス・スクールには) チャールズ・ヤングという私と同年の生徒がいて、そのお母さんがある年の夏休みに、私を下宿人として、ひきとってほしいと校長まで申しでたということだった。こうして私は、1939年の6月のはじめに、マサチューセッツ州ケムブリッジ市のヤングさんの家の下宿人になった。<sup>10)</sup>」

しかし、実際の経緯はすこしちがう。当のチャールズ・ヤングの証言はこうなっている。

「ハーヴァードで俊輔は下宿に一人で暮らしていた。どうして知ったのか、彼の父君は、息子がほかの学生たちとつきあっていないこと、成長期の若者にふさわしい食物をとっていないことを耳にした。父君は、息子が暮らすよい環境をさがしていただけないかと、ミドルセックス校の校長ウィンザー先生に頼んできた。ウィンザー先生は私の母マリオン・ヤングに、お宅にあずかってくれないかと相談した。「よろこんで」と言って、母は引きうけた。<sup>11)</sup>」

これはどう見てもチャールズ・ヤングの証言のほうが真実をえぐっていると思われる。というのは、いっばんにはこのような事情を鶴見本人が知っていることの方がまれだからである。ヤング一家は鶴見にとってアメリカ時代の貴重な思い出となり、またヤング家との出会いが鶴見にあらたな社交資本を提供することにもなるのだが、そこに父祐輔の影が存在したことには注目しておきたい。というのは、社交資本は本人の意図的な利用にかぎらず、本人の意図とは無関係に機能することがしばしば起こるからであり、たとえ本人の意図とは関係なくとも、かれにおおきな利便をもたらすことがあるからである。この事実にあたり、迷惑だ、はずかしい、余計なお世話だと憤慨しようとも無関係に、である。

ヤング家を媒介にして鶴見が出会った人物には、ハーヴァードの極東部主任教授だったセルゲイ・エリセーエフがいる。周知のとおり、エリセーエフは夏目漱石門下の日本文学者である。また、当時、アメリカの論壇の旗手として名を売っていたマックス・ラーナーともこの家で出会っている。鶴見がその後かれらとの関係をふかめたという事実はないけれども、極東から留学している一青年がアメリカで開拓する人的ネットワークの一例としては、鶴見がきわめてめぐまれた環境にあったということはまちがいない。さらに、ヤング家については、つぎの事実も記憶

10) 「ヤングさんのこと」(TSS, 12), 4頁。

11) チャールズ、ヤング「兄弟にして友なる俊輔」(『鶴見俊輔集 11』月報)

しておきたい。長男のケネスはハーヴァードの政治学部を優等賞をとって卒業し、やがて国務省の日本課長、極東局長、タイ米国大使をつとめた人物であり、したしく交わったチャールズはウィラード社の社長となる人物である。かれらは東部エスタブリッシュメントの一翼になる人物であったことはまちがいないし、ヤング家とはそのような息子たちの家庭だったのである。

ところで、ヤング家にはもうひとりの日本人が下宿することになる。東郷文彦という外務省の職員で、在外研究員としてハーヴァードの大学院でまなんでいた人物である。かれはボストンの日本人学生会の会長（鶴見は書記をつとめた）でもあったが、鶴見が下宿しているヤング家を気にいって移ってくる。

この東郷という人物は旧姓を本城という。かれは東京大学をでて外務省にはいるのだが、かれの岳父が東郷茂徳であった。そして、この東郷茂徳とは、1912年に外務省に入省し、奉天、ドイツ、アメリカなどに在勤後、33（昭和8）年欧米局長、34年欧亜局長、37年に駐独大使をつとめた人物である。当然のことながら、東郷茂徳と鶴見祐輔のあいだには知遇があったと考えられるのだが、その息子（義理の息子）たちがアメリカで下宿をおなじくするわけである。

東郷文彦のその後のあゆみは鶴見と対極をゆくことになる。58年には安全保障課長となり日米安保保障条約の改定交渉にたずさわる。67年に外務省北米課長となり、沖縄返還交渉においては「核抜き本土並み」という共同声明づくりの実質的起草者となった。この東郷のあゆみは、安保反対闘争にかかわり、「ベトナムに平和を！ 市民連合」を組織し、アメリカの世界戦略に戦後一貫して反対しつづけた鶴見とは対照的である。しかし、かれらがわかい留学の日々をおなじ下宿ですごしたという事実、この事実がそれぞれの父親たちの接点とまじわるという事実は興味ぶかい。個別的な人的ネットワークが交錯するのは、すでにそのネットワークが既存のおおきなネットワークのなかに存在していたということをしめしている。

鶴見に賦与された社交資本がどれほど上質のものであったか、それを証明するのは駐米大使斉藤博との関係であろう。すでに述べたように、鶴見は1937年にアメリカに短期間滞在した。そして38年の正月をワシントンの斉藤大使の公邸ですごしている。斉藤博は外務省屈指の知米派として知られ、新渡戸稲造、杉村陽太郎とともに日本の三大国際人と評された人物である。斉藤は34年から駐米大使として困難な時期の日米関係の調整につとめたが、武者小路実篤、志賀直哉とも親交があり、自由人としての気質ももっていた。こういう人物との知遇を15歳の少年鶴見が手にする。これまた父祐輔の社交資本のなせる業であった。

38年の正月といえば、前月（37年12月）に日本軍機が誤ってアメリカの艦船パネー号を爆沈するという事件が起きたばかりだった。下手をすると日米開戦にもなりかねないこの事件を、斉藤は本国の訓令を待たずにみずからの判断で危機回避に努力した。その逸話を鶴見は日本大使公邸で聴くことになる。後藤新平の孫としてそだった鶴見にとっては、この事件も斉藤の奮闘ぶりも聞き慣れた国際政治の生々しい現実のひとつコマにすぎなかったのかもしれない。しかし、国際政治のかけひきが談笑のなかで語られる環境のなかに身をおくことができるほどの上質の社交資

本を鶴見が継承していたことを、このエピソードは証明している。そして、ことは国際政治のかけひきだけではなかった。これは父祐輔の社交資本からたどってもいいのだが（脚注4の岩永裕吉のことを想起せよ）、文学者の世界も鶴見にとっては本や雑誌のなかに活字としてだけ存在するものではなかった。斉藤との日常会話のなかに武者小路や志賀が具体的な人物として登場する、そのような環境のなかに鶴見はそだったのである。

アメリカではじめて知り合った人物のなかに坂西志保がいる。しかし坂西はもともと父祐輔の知人であった<sup>12)</sup>。斉藤大使もまた坂西の話を鶴見に聞かせている。その坂西と鶴見はおなじ交換船で帰国してきた。幼い頃からうわさを聞かされてつづけてきた人物と鶴見はこの船のなかではじめて出会った。ミシガン大学の哲学科助教授、バージニア大学教授を歴任し、アメリカ議会図書館の東洋部主任であった坂西は、第二次大戦後GHQの顧問をつとめ、アメリカ通の評論家として活躍する一方、選挙制度審議会、憲法調査会、国家公安員などをつとめた人物である。社会学の分野では、石垣綾子の『主婦第二職業論』にたいして「家事・育児天職論」の立場から反論した人物として記憶されているが、鶴見のその後との関連で重要なことは、武谷三男を姉和子に紹介したのが坂西であったという事実である<sup>13)</sup>。つまり、坂西の存在がなければ『思想の科学』七人衆は集まらなかったことになる<sup>14)</sup>。

坂西と鶴見との関係はけっして密接なものではなかった。アイゼンハワー大統領が訪日のさい、これに反対しようと戦前の日本人米国留学生が反対のピラを書き、鶴見が坂西に署名を求めた（ただし、坂西はこの申し出をうけなかった）というエピソード<sup>15)</sup>などいくつか残っている程度である。しかし、それは当然のことでもあった。戦後史のなかで、坂西と鶴見はその思想性と社会的立場がおおきく異なっている。だが、戦後ながらく政治的ブレインとして活躍する人物とも鶴見が人的ネットワークをもっていたこと、それが父祐輔の社交資本に由来すること、このことを記憶しておきたい。

アメリカ留学時代に鶴見がしりあい、世話になり、戦後も密接な関係を維持した人物はおそらく都留重人であろう。しかし、この都留との関係をつくったのも、じつは父祐輔であった。都留

- 
- 12) 鶴見祐輔と坂西志保との関係は坂西がアメリカから帰国直後から復活し、祐輔が主宰していた太平洋協会につくられたアメリカ研究分室で中心的役割をはたしたのが、坂西だった。このアメリカ研究分室には、都留重人、清水幾太郎、松下正寿、鶴見和子、福田恒存などがあつまった。安田常雄『『思想の科学』・『芽』解題』（安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』、久山社、1992）、215頁参照。
- 13) 武谷三男「職能としての学問のために」（安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』、久山社、1992）、147頁参照。
- 14) よく知られているように、それは都留重人、渡辺 慧、丸山真男、武谷三男、武田清子、鶴見和子、そして鶴見俊輔である。
- 15) 「独行の人：坂西志保さんのこと」（TSS, 10）、245頁。

の証言はこうなっている。

「1938年のころ、ハーヴァード大学のアーサー・シュレジンガー教授を介して得た鶴見祐輔氏との知遇が、そもそもの出発点である。

当時私は、大学院の学生で同時に経済学部の助手をしており、「アダムス・ハウス」という学生寮の客員として、三度の食事をそこで食べていたが、同じ「ハウス」の顧問教授だったシュレジンガー教授が、ある朝のこと、今日は日本人のお客を連れていくから一緒に中食をとろう、と電話してこられた。会ってみると、そのお客は鶴見祐輔氏で、用件は、「こんど俊輔<sup>16)</sup>という息子がハーヴァード大学にくることになるから、よろしく頼む」ということであつた。」

こうして鶴見はハーヴァードでも俊英と評判のたかかった都留重人としりあい、おおきな影響をうけることになる。鶴見は都留を「生涯にわたる学問上の師」とさえ言うのだが、それも当然のことかもしれない。プラグマティズム研究へと鶴見をいざなつたのは都留であつた。

しかし、この都留との関係も元をただせば父祐輔が依頼したものであつたし、また高級官僚出身のベストセラー作家で対米ロビイストという祐輔の社会的地位がなければ、A. シュレジンガーから都留重人へとつづく人間関係も簡単には成立しなかつたはずである。都留はのちに『思想の科学』創刊時の同人として名を連ねることになるのだが、こうしてみれば『思想の科学』創刊を可能にした人的ネットワークにも父祐輔の社交資本が影響していたことがわかる。

都留重人は、とかく殻に閉じこもりがちな鶴見をアメリカにおける日本人ネットワークのなかに連れ出した形跡がある。たとえば1939年、野上豊一郎・弥生子夫妻が訪米したとき、鶴見は東郷文彦とともに野上夫妻とあつている。むろん都留は夫人とともにこの歓迎会に出席している。野上豊一郎は英文学者であり能楽の研究家でもあつた。九州大学をへて、法政大学教授、学長、総長をつとめた人物である。野上弥生子は、周知のとおり、夏目漱石などに師事した小説家である。

この歓迎会は藤代博士宅でおこなわれたのだが、その出席者の顔ぶれをみれば、鶴見がアメリカで参加した社会的ネットワークの質がよくわかる。<sup>17)</sup>出席者はこうだつた。細入藤太郎、東郷文彦、川口正秋、原寛夫妻、都留重人夫妻、今井海軍少佐、志賀医学博士、そしてホストの藤代夫妻であつた。このうち、原寛は当時国立資源科学研究所の所員をつとめていた植物分類学者で、のちに昭和天皇の生物学研究をサポートする学者グループの一員として活躍する人物である。細

16) 都留重人「『思想の科学』に寄せた期待」（安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』、久山社、1992）162頁。

17) 『鶴見俊輔集1』月報に収められた写真を参照せよ。

入藤太郎は当時ハーヴァード大学大学院に在籍する立教大学の助手であったが、アメリカ文学・思想を専攻し、帰国後は文部省大学設置審議会などの委員をつとめる人物である。ここには「上質」の知識人社会がある。と同時に、パーティの参加者が夫婦単位であることも興味ぶかい。それは脱日本化された社交文化の象徴と理解することもできるだろう。しかし、これらの事実、つまり「上質」の知識人社会、脱日本化された文化とは、のちに鶴見がその対極へと離反してゆく負の準拠枠ではなかったか。

さらに、こういうことをつけ加えておきたい。鶴見が日本人の外国体験を語る時、しばしば中浜万次郎（ジョン万次郎）を引き合いにだす。<sup>18)</sup>「ひとりの個人」として独力で生きぬいた万次郎を肯定的にかたる。しかし万次郎の生き方と鶴見じしんのそれとはおおきく異なっている。すくなくとも万次郎には「賦与された社交資本」は皆無だった。ジョン万次郎について鶴見がかたるとき、鶴見のここには忸怩たる想いがあふれていたと想像しても、それはあながち間違った想像ではないだろう。

### 機会としての社交資本

ある社会的環境に生み落とされることによって自動的に開かれる社会的機会というものがある。そして、この機会によって手にすることができる社交資本というものがある。この資本はけっして相続されるものではないけれども、といて、たんに本人の努力のみによって獲得されるものでもない。このような社会的資本を「機会としての社交資本」と呼びたいのだが、では鶴見の「機会としての社交資本」はどのようなものであったか。

前節で鶴見がアメリカで野上豊一郎・弥生子夫妻や原寛と出会った事実についてと述べた。これは鶴見が手にした「機会としての社交資本」の一例と考えてもよい。しかし、「機会としての社交資本」の典型的な例は、むしろ鶴見の学校生活のなかにみとめられる。

たしかに鶴見は日本での学歴は小学校卒でしかない。中学校は卒業していない。しかし、みじかい学校生活のなかで鶴見がすぐれた人材と出会っていることに注目したい。

まず東京高等師範附属小学校の校長であったのが、佐々木秀一である。鶴見は佐々木の教育方針をたかく評価しているが、<sup>19)</sup>この佐々木とは『黒偉人物語』の作家であり、鶴見はこの本を10歳のときに読んでいた。また、佐々木には留学の経験もあり、デューイと会見したこともある。鶴見は佐々木を「日本教育界のプラグマティズムの実践者」として評価するのだが、やがてプラグマティズム哲学研究者としてその知的経歴をあゆみだす鶴見が小学校時代にプラグマティズムの実践者と出会っていることは興味ぶかい。また、府立高等学校尋常科には梁田貞という音楽の

18) ささまざまな言及があるが、ひとつだけ示しておけば、「ひとが生まれる」(TSS, 8, 1972)を見よ。

19) たとえば、鶴見俊輔『期待と回想』(晶文社, 1997, 上巻) 61頁以下を見よ。

教師がいたが、この人は「どんぐりころころ」や「城ヶ島の雨」などの作曲をした人物であった。鶴見が通った学校は優秀な人材に恵まれていたといえることができる。

しかし、子どもにとって重要なものは教師よりもむしろ同級生だろう。小学校時代の同級生には後の文部大臣永井道夫、小説家中井英夫、社会学者の橋本重三郎、中央公論社社長となる嶋中鵬二などがいた。

永井の父親が永井柳太郎であることはよく知られている。早稲田を卒業したのちオックスフォードにまなび、帰国後、母校の社会政策・植民地政策担当の教授となり、政界に転身した人物である。鶴見は『共同研究 転向』の「翼賛運動の設計者」のなかで永井柳太郎の転向を「偽装転向」として取り上げているが、鶴見にとって研究対象は身近に存在する同級生の父だったのである（むしろ、この研究対象はもっと身近に存在した。それが父祐輔であったことは言うまでもない）。

中井英夫の父は中井猛之進という。東京大学理学部を卒業して東大教授となった人物であるが、鶴見はのちにこの同級生の父とインドネシアであっている。それは鶴見が海軍の軍属としてインドネシアに滞在していたときのことだった。当時、中井猛之進はインドネシア植物園の園長となっており、鶴見は軍事用の擬装用植物について教を乞うために中井をたずねている。専門的な軍務が小学校時代の友人の父によって助けられるためには、かれらが同じ社交資本界（この「界」は champ の意）に属していることが必要である。

のちに中央公論社の社長となる嶋中鵬二との関係はふかい。『思想の科学』の危機をすくい、危機に陥らせた（『天皇制問題特集号』問題）当時の中央公論社社長が嶋中鵬二だった。だが、鶴見は鵬二の兄晨也についても記憶している。というのは、鵬二とは二歳違いの兄晨也も東京高等師範付属小学校にかよっており、鶴見には晨也の書いた作文を読んでこころを動かされた記憶がある。当初、中央公論社の社長はこの晨也がつぐ予定であり、晨也はじっさい中央公論社に入社するのだが、病死したため、東大独文科をでて明治大学、東洋大学で教鞭をとっていた鵬二のところにお鉢がまわってくることになる。晨也、鵬二兄弟の父が嶋中雄作である。嶋中雄作は早稲田大学哲学科を卒業し、島村抱月の紹介で反省社（のちの中央公論社）に入社した人物であった。

ちなみに、嶋中鵬二の岳父が政治学者の蠟山政道である。知られるとおり、蠟山は東大法学部を卒業し、吉野作造に私淑し、東大新人会、昭和研究会に参加した、典型的な東大エリートであった。かれは中央公論社副社長兼雑誌『中央公論』の主幹をつとめたのだが、こうしてみれば嶋中は出版界（この「界」は champ の意）と学問界（この「界」もおなじく）の結節点に位置している人物であることがわかる。小学校時代、鶴見はこういう人物を「機会としての社交資本」として手に入れたのだった。

このように述べてくれば、東京高等師範付属小学校という学校じたいが恵まれた家庭の子弟がかよう学校であったことがわかる。じじつこの学校は良家の子女がかよう有名な学校だったので

ある。いく人かの卒業生をあげておけば、鳩山一郎、永井荷風、芥川比呂志、そして現大蔵大臣宮沢喜一などがいる。<sup>20)</sup>めぐまれた家庭環境は、相続されるべき「賦与された社交資本」だけでなく、その子どもたちに豊かな「機会としての社交資本」もあたえることになる。たしかに鶴見の日本での学歴は小学校卒ではあるけれども、しかし小学校においてこれだけの「社交資本」を手にしたとすれば、鶴見にとって日本の学校制度の意義は十分あったと考えてもいいだろう。というのは、学歴というものを子どもたちがその後の人生をよりよく生きのびるための社会的手段にすぎないと考えるならば、鶴見は当時の日本の一般的な子どもが手にする学歴以上の手段をじゅうぶんに手にいれたと考えられるからである。

さて、留学はひとつの貴重な社会的機会である。とりわけ1930年代に海外留学ができるということはきわめて恵まれたことであり、必然的におおきな「機会としての社交資本」を留学生にあたえることになる。つまり、経済的に、また文化的にめぐまれている人間だけが留学できる時代と環境は、留学した人に、おなじように経済的に文化的にめぐまれている人との出会いの機会をあたえるからである。じじつ、鶴見はこの「機会としての社交資本」を留学生活によって数おおく手にいれるのだった。

さきにA. シュレジンガーとの出会いを「賦与された社交資本」の項で述べておいたが、しかし、視点を変えればこの社交資本を「機会としての社交資本」と分類することもできる。両者は画然と区分できるものではないし、また前者の資本の所有が後者の資本獲得の前提となることがしばしばある。さまざまな社交資本獲得の過程は、漸進的に、連続的に、重複しながら進行すると考えられるだろう。したがって、斎藤博や坂西志保、さらには都留重人との出会いは、留学というチャンスをきっかけとしてみれば「機会としての社交資本」と解釈されてもいい。またS. エリセーエフやM. ラーナーとの出会いも、おなじような意味で「機会としての社交資本」に分類してもいいだろう。だが、これらのケースこそ、「賦与された社交資本」が「機会としての社交資本」に漸進し、連続し、重複する恰好の例だともいえるだろう。

では、鶴見が留学をきっかけに手にした、純粋な「機会としての社交資本」とはどのようなものであったか。それを鶴見の南博との出会いのケースにみることができるだろう。

鶴見がアメリカに留学したとき、南はすでにコーネル大学に在学中であった。かれらが出会うのは、南の記憶にしたがえば、1941年の6月17日のことである。場所はニューヨークのインターナショナル・ハウス（外国人学生の宿泊施設）ではなかったか、と南は言う。<sup>21)</sup>南はのちに

20) 鳩山一郎は、東大法科教授・衆議院議長であった鳩山和男と共立女子職業学校（現・共立女子大）の創設者春子の長男であり、東大英文科を卒業し、政治家をこころざし、やがて首相になる。永井荷風については、拙稿「荷風から：下降と「人びと」の構成」を参照されたい。芥川比呂志は周知のとおり、芥川龍之介の長男で俳優・演出家だった。また、宮沢喜一は、祖父に鉄道相の小川兵吉、父に衆議院議員宮沢裕という家庭に生まれた知的エリートである。

21) 南 博「鶴見俊輔十九歳」（『鶴見俊輔著作集4』月報）参照。

『思想の科学』の重要なメンバーになり、社会心理学関連の重要な論考を発表することになる。だが、この南との出会いに父祐輔の社交資本は直接的には関与していない。鶴見は父の準備した留学という機会のなかで偶然にも、幸運にも、南と出会うのである。だが、この「偶然」と「幸運」は構造的にはすでに仕組まれていた偶然と幸運であったということが出来る。むしろ、「仕組まれていた」というのは、上質の人材、つまりその出会いがのちに大きな社会的便宜をあたえるような人材と出会う蓋然性が高いルートに乗せられた、という意味である。

おなじような出会いには、武田清子との出会いがある。鶴見は武田とニューヨークの日本文化会館ではじめて会った。当時、文化会館の館長をしていたのは、元内相秘書官で、ILOの政府側委員などをつとめた前田多聞であり、この前田の紹介で鶴見は武田と出会う（正確には、前田が武田に鶴見と会ってみてはと勧めたようである）。武田静子はのちに『思想の科学』創刊時のメンバーとなるわけだから、この出会いは鶴見にとってはきわめて重要だったということになる。

父祐輔と前田との関係がいつはじまり、またどのていど親密なものであったかは、くわしくはわからない。しかし、その生年（祐輔は1885年1月3日、前田は1884年5月11日）と、おなじ東大法学部出身の元高級官僚であることからみて、ふたりの間にはかなり密接な関係があったものと考えていいだろう。<sup>22)</sup>しかも情緒不安定な息子をアメリカ留学に送りだしたわけである。そして祐輔は息子の予備校（ミドルセックス校）の校長に下宿の世話まで依頼する父であった。だから、祐輔が鶴見のことを日本文化会館の館長である前田によるしく頼んだということは充分に考えられる。また、当時のアメリカにおける日本人ネットワークの質から想像しても、そのような便宜の依頼があったと考えるのが当然であろう。したがって、鶴見と武田との出会いの背後に父祐輔の影をみて取ることもできる。しかし、ここでは鶴見と武田との社交資本を純粋な「機会としての社交資本」と分類しておきたいと思う。その理由は、祐輔の便宜依頼について確証がえられない、ただそれだけの理由による。

ところで、「機会としての社交資本」として忘れてはならないのは、ハーヴァードにおけるおおくの教授たちとの出会いである。とりわけ鶴見は学問的には幸運だった。鶴見がハーヴァードに入学した時期は、ちょうど「ウィーン学団」の論理実証主義がアメリカの哲学界に移入された時期とかさなっている。もちろん、それはナチスに追われた有能な学者たちが数おおくアメリカに亡命した流れのひとつであったが、プラグマティズム哲学を専攻しようとした鶴見にとって、論理実証主義の影響をうけてアメリカ産のプラグマティズムが新しく生まれ変わろうと

22) こういう事実をあげておきたい。鶴見祐輔は渋沢財団の依頼をうけて、アメリカに日本図書館をつくらうとしていた。やがてこの図書館建設は渋沢財団の手をはなれて外務省がおこなうことになる。こうして前田多聞が日本文化会館の館長を引き受けることになる。それゆえ、鶴見祐輔が息子のことを前田に頼んだことはじゅうぶん考えられる。鶴見はこの文化会館で図書カードの整理などのアルバイトをしていたのだが、これも前田の配慮だったと思われる。

する時期にハーヴァード大学に入学したことはきわめて幸福なことであった。つまり、かれは偶然にも、そして幸運にも最先端の哲学と出会うことができたのである。

鶴見はハーヴァード一年のときに、C. モリスの「プラグマティズム・ムーヴメント」という講義を聴いている。モリスは「ウィーン学団」をアメリカの哲学界に移入した人物のひとりである。そしてもうひとりがW. クワインなのだが、クワインは鶴見のチューターをつとめてくれた人物である。鶴見はR. カルナップの「分析哲学入門」と「経験論の原理」という講義を聴いているし、鶴見の卒業論文の指導を引き受けたのはウィリアム・ジェイムズ論でピューリッツァー賞をうけているR. ペリーであった。また記号論理学のC. ルイスの指導も受けている。講義を聴いたということでは、B. ラッセルの講義もT. パーソンズの講義もP. スウィージーの講義も聴いている。哲学から社会学、社会主義経済理論まで、当時のアメリカ学会の最高峰と鶴見はハーヴァードで出会ったことになる。

もちろん、これらの人物とのつき合いは純粋に学問的なものであり、また鶴見は戦争によってアメリカを去ることを余儀なくされたわけだから、かれらとの関係がその後の鶴見の人生に直接的に社会的便宜をあたえることはなかった。しかし、考えてみれば、じつは学問の世界における社交資本は、それだけでじゅうぶんなのである。この世界において社交資本は、わたしはその先生の指導を受けたことがある、という事実だけでじゅうぶんその効果を発揮するからである。第一期『思想の科学』の「創刊の趣旨」には「本誌は……世界の思潮を、わが國に移入することに専念し、先ずその出発点として、英米思想の紹介に盡力する<sup>23)</sup>」と書かれているのだが、この趣旨を実現する経歴と知識を鶴見はハーヴァードでじゅうぶん手にした。つまり、学問の世界の社交資本とは、伝授され、学び、継承した知識それじしんが、かれののちの人生を切りひらくことになる。この世界における社交資本は文化資本や知の資本という形に転化する、そのような特性を持っている。

だが、ハーヴァードで出会ったこの人物との関係は、すこしちがう。その関係は戦後もつづく。それは、この人物がいく度も日本を訪れ、鶴見と会う機会をもったからである。E. ライシャワーである。

鶴見とライシャワーとの出会いはハーヴァードで鶴見がライシャワーから日本語を学んだことから始まっている。当時、ライシャワーはハーヴァード大学日本語学科の講師であった。宣教師として日本をおとずれ、東京女子大の創立にも尽力したA. ライシャワーの子どもであるエドウィン・ライシャワーは東京に生まれている。パリ大学、東京大学、京都大学に学んだエドウィンは、鶴見よりも日本の学歴は高い。父オーガストが後藤や鶴見祐輔と関係があったかどうかはわからない。東京女子大の常務理事をつとめていたから、なんらかの関係があった可能性はある。この関連でエドウィンがすでに鶴見を知っていたということは十分考えられるのだが、しかし確

23) 『思想の科学』(創刊号, 1946), 1頁。

証のないことはここでは書かない。ハーヴァードで出会ったという事実だけを確認しておこう。

つぎに鶴見がライシャワーと出会うのは、1948年のことである。大戦中ライシャワーは国務省に勤務したが、48年、陸軍省が派遣した対日人文科学派遣団の一員として来日する。このとき鶴見は京都大学の嘱託講師だった。派遣団との会議が京都でおこなわれたとき、鶴見は京大側の通訳として参加してライシャワーと再会する。この経緯については『期待と回想』<sup>24)</sup>にくわしく記されているが、その後ライシャワーとの関係は微妙な軌跡をたどりながらつづいている。1971年には「日本の民主主義」について公開討論をしているし、<sup>25)</sup>1979年、カナダのハリファックスでおこなわれたE. H. ノーマン追悼会議の席上でも同席している。だが、ここで「微妙な軌跡」というのは、ライシャワーはケネディ大統領の要請で駐日大使（1961年）となるのだが、この駐日大使時代に鶴見は「ベ平連」を立ち上げるのである（1965年）。ライシャワーの駐日大使時代は日米安保締結からベトナム戦争へとつづく時期であり、日本における反米運動が先鋭的にもりあがった時期とかさなっている。このとき、鶴見とライシャワーは政治勢力としては対極にあるものとして対峙する。ライシャワーは日本にたいしてふかい愛情と知識をもっており、鶴見はアメリカにたいして基本的には愛情と感謝の念をもっており、しかも個人的にはながい関係を維持しながら、かれらは政治的に対峙する。「微妙な軌跡」というのは、このことである。

だが、その関係がたとえ「微妙な」ものであったにしても、鶴見がハーヴァード時代に手にしたライシャワーとの社交資本がやがて一市民（というには鶴見はおおきな文化資本と知の資本、社交資本の所有者となっていたのだが）と駐日大使との対峙という構図を可能にしたことは興味ぶかい。海外留学したいが恵まれた子弟でなければ不可能であった時代にアメリカに留学し、そこで知り合った人物がやがて駐日大使として来日するという事実、これがまた反戦・平和・反米を志向する思想家鶴見、社会運動家鶴見の軌跡にふかみと重さをあたえるという事実は、鶴見がアメリカで獲得した社交資本の質がどれほど上質で、また社会的にも政治的にも有効性をもったものであったかがわかるだろう。

もちろん、鶴見がおこなった社会運動がライシャワーをうごかし、アメリカの極東戦略に変更をせまったわけではまったくない。しかし、運動体にとっては鶴見のような社交資本のゆたかな人物がいる、駐日大使と交友のある人物がいるという事実は貴重なものであったにちがいない。社交資本には、本人の意図しない社会的効用というものがある。ときとして社交資本は自立し、他者がその資本を利用しようとするこさえおこる。有名人との知己をえたがる人びとの心情とはこのようなものであるし、特定の社会界において（学問界でも、芸能界でも、政治界においても）シンボリック的存在として奉られている人物とはその社交資本を利用される人物であることがおおい。

24) 鶴見俊輔『期待と回想』（晶文社、1997、上巻）、55-56頁。

25) 討論「日本の民主主義」（TSZ、『民主主義とは何だろうか』、1996）

鶴見が社会運動に参加したのは、かれの思想と情熱と意志に由来するものであった。しかし、社会現象を分析するばあいには、当人の意図や情熱や意志はひとまずカッコにいれられる必要がある。こういう視点からみれば、鶴見の社交資本はたんに鶴見の人生をきりひらいたのみならず、鶴見が参加した運動体の未来さえきりひらく力をもっていた。つまり、「シンボリック的存在」は各種の社会界や運動体にその存在と行動に正統性を賦与するからである。だが、この話はすでに「機会としての社交資本」の話から、「賦与する社交資本」の話へと移ってしまっている。先走りすることはやめて、つぎの節では鶴見の「形成する社交資本」について述べたいと思う。

### 形成する社交資本

人はだれでも、長ずるにつれて自分の世界を形成してゆく。成長するとは、そういうことである。これを社交資本の視点からいえば、人はだれでも「賦与された社交資本」の時代をへて、みずから「形成する社交資本」の時代へと移行する、とすることができる。「賦与された社交資本」→「機会としての社交資本」→「形成する社交資本」の流れは、人の成長過程と大筋において対応している。

鶴見俊輔はたしかに恵まれた家庭に生まれた「おぼっちゃん」である。しかし、かれはこの地位に甘んじていたわけではない。むしろそれに反発し、もがき、そこから脱出しようとした。そのような苦悩の軌跡が、かれの人生であった。また、この軌跡こそかれの思想の核心を構成するものであったとすることができる。そして、かれの社交資本の「形成」という点からも、このことをかいま見ることができる。たとえば石川三四郎との出会いは、鶴見の「形成する社交資本」の好例だろう。石川三四郎は、父祐輔や祖父後藤新平などから紹介され、その社交資本を相続されるような人物ではなかった。

明治以来のアナキスト石川三四郎について鶴見が会おうのは、まず石川の文章を通じてである。鶴見は1938年ころ（鶴見16歳）、石川の「潮の干満」を読んだ。この年から鶴見のアメリカ留学がはじまり、石川との直接の出会いは戦後までもちこされることになるのだが、鶴見のころには石川のことがたえず存在していたようである。その証拠に、鶴見は戦後まもなく石川に手紙を書く。そして46年7月18日に鶴見は石川の自宅を訪問している。この石川とのつき合いは、鶴見がみずから選びとった社交資本であった。

もちろん、人の人生とは連続的発達の過程であり、鶴見の石川との出会いには、すでに述べた石本新とのつき合いがなんらかの影響を与えていただろう。クロボトキンを読んだことと石川との出会いにはつよい関連があっただろうと想像できる。しかし、みずから手紙を書き、直接会いにゆくという行為をおこなったのは、鶴見じしんである。ここに、「賦与された社交資本」から

26) 拙稿「鶴見俊輔試論」参照。

はなれて、「自立」しようとする鶴見の姿を見ることができるだろう。

石川との出会いは、また、新たな社交資本を形成することになる。ある人物との出会いが、その人物とつながる別の人物との出会いになることは誰でも経験することである。鶴見は、訪問した石川の自宅で大沢正道と出会った。大沢は当時まだ大学生であったが、石川を支持するシンパであり、その後平凡社に入社することになる。のちに大沢は『オーウェル著作集』の企画を鶴見のところへもってくるし、また鶴見の代表作『転向』の出版にも大沢はかかわっている。この大沢とのあいだに形成された社交資本は、社交資本というものの自己増殖過程の一例をしめすものであるだろう。

このような出会いは灯台社の人びと（明石静子、村本一生・ひかる兄弟）との出会いにもあらわれている。確信をもって言うことはできないけれども、鶴見の同志社時代に同僚であった和田洋一は灯台社の活動について鶴見におおきなインスピレーションをあたえたと思われる。和田には『戦時下抵抗の研究』<sup>27)</sup>という二巻本の編集があり、ここに灯台社のことがくわしく書かれている。鶴見はこれを読んでいる。これを読んで、灯台社の人びとを訪問する気になったのではなかったか、と私は推測する。

鶴見がみずから足をはこぶことによって成立した関係というのは他にもある。たとえば柳宗悦との関係がそうだ。鶴見は小学校時代にすでに柳の著作を読んでいたが、柳についてより詳しい情報を鶴見にあたえたのは、のちにレバノン大使、ポルトガル大使となる和田周作であった。鶴見の中学時代のことである。そして鶴見は、ハーヴァード大学に入学し、1940年に一時帰国したときに、柳に手紙を書いて会いに行っている。小学校時代に読んだ柳の宗教書から鶴見はジェイムズを知ったというから、ハーヴァードでジェイムズについて研究しようとしている鶴見にとって柳は知的恩師と言ってもよい存在であったのだろう。この時、鶴見が柳とどのような話をしたのかはわからない。しかし、のちに鶴見が展開する「限界芸術論」には、柳田民俗学の影響とならんで柳の影響がはよく現れることには注意しておきたい。

葦津珍彦とのつき合いもまた、鶴見が選びとったものである。天皇制支持者である葦津と鶴見のあいだには思想的なおおきな亀裂がある。にもかかわらず、鶴見は市井三郎に紹介された葦津との関係を維持しつづけている。そして、葦津が直接紹介したのではないけれども、葦津との関係で鶴見は夢野久作の長男杉山龍丸と関係をもつ。ここから『夢野久作：迷宮の住人』がうまれることになる。

このように書いていけばきりがない。鶴見の「形成する社交資本」とは鶴見の人生の大半を占める重要な社会関係を意味しているのであるから、その全貌を描きだすことは不可能である。し

27) 明石順三と灯台社については、同志社大学人文研究所編『戦時下抵抗の研究』（みすず書房、1968、I）。

たがって、この点については文末におさめた資料「鶴見俊輔の人的ネットワーク<sup>28)</sup>」を参照していただくことにして、ここではふたつの点について補足的説明をしておこうと思う。それは、第一に、前項の「機会としての社交資本」との関連について、そして第二に、『思想の科学』をめぐる「形成する社交資本」についてである。

前項において、鶴見のクワインやペリーなどとの出会いを「機会としての社交資本」として整理しておいた。しかし、これには注意が必要である。というのも、「機会としての社交資本」と「形成する社交資本」の境界線を容易に引くことはできないからである。ある人物との出会いをのちの人生における資財（つまり資本）に転化しうるかどうかは、その出会いを有効なものとする当人の努力がどうしても不可欠である。クワインやペリーとの出会いは教師と学生という関係においての出会いであるから、この社会関係を社会的に、また当人の人生において意義あるものとするためには、学生である鶴見はそこで期待されている知的業績をあげる必要があった。つまり「優秀な」学生である必要があった。これに鶴見がじゅうぶん応えたからこそ、かれらとの関係は学問界における社交資本として維持されたわけである。このように当人の努力が必要とされた点に注目すれば、クワインやペリー、さらに講義を受講しただけのラッセルやパーソンズ、スウィージーなどとの関係を「形成する社交資本」に分類することもできる。このように「機会としての社交資本」と「形成する社交資本」の関係は微妙である。それは、おそらく、前者をひとつの場（つまり「界」）として、後者をその場における当人の意志と努力の関数として整序することができるだろう。ただし、場さえあたえられない者には意志も努力もないこともつけ加えておかなければならない。

第二の『思想の科学』をめぐる「形成する社交資本」についてだが、たしかに創刊時のメンバー七人のうち、鶴見がそれ以前から交流のある人物は都留重人と武田清子、そして姉和子しかいなかった。武谷三男は坂西志保の紹介で和子が連れてきたわけだし、丸山真男にも和子が連絡をとったのだった。当時の鶴見は「そのころ私にとっては、世界と私との間に姉がたって、かろうじて交渉がなりたっているもので、そうでないと自分が世界からはがれていってしまうような不安があった<sup>29)</sup>」ような状態だったから、和子がいなければ『思想の科学』の創刊もおぼつかない状態だったようである。しかし、当時のことを詳細に検討すれば、じつは鶴見じしんの意図と見識がそこに反映されていたことがわかる。

たとえば、和子が連絡をとったという丸山真男の証言はこうなっている。

「戦争中に鶴見和子さんが交換船で帰ってきて、いきなり研究室にぼくを訪ねてきたんです。

28) とはいえ、この資料もいまだ完璧なものではない。だが、本文の趣旨を証明するだけの人物はあげておいたつもりである。

29) 「私の地平線の上に」(TSS, 8), 123頁。

初対面です。あとで聞いたら、俊輔さんが「ぜひ行け」と言ったらしい。どうしてかという  
と、俊輔さんがぼくの論文を読んでいたんですね、おそろしく早熟なんだな。『国家学会雜  
誌』<sup>30)</sup>に載った論文ですから。……俊輔さんは徂徠の徂の字も知らないけれど、読んだんです  
ね。」

この証言にあるように、鶴見は明確な洞察力をもっていた。たしかに、少年期から青年期にかけ  
ての鶴見は自閉ぎみだったから、社交ということばがイメージさせるような行為特性はもってい  
なかったのだろう。これを姉の和子が助けた場面が数おおくあったことは想像にかたくない。し  
かし「形成する社交資本」の前提が当人の見識や意志、情熱、才能などにあるとすれば、鶴見は  
この前提条件をじゅうぶん持っていたということが出来る。

桑原武夫とのつき合いも鶴見の才能があっではじめて可能となった。『思想の科学』第五号に  
「基礎日本語と小学校の教育」という論考をよせた土居光知（東北大学教授）が第二号に掲載さ  
れた鶴見の「ベシック英語の背景」を桑原に推薦する。その感想を桑原が書き送ってきたこと  
から桑原と鶴見の関係ははじまる。<sup>31)</sup>しかもその関係はなまかななものではなかった。桑原は学内  
に反対があるにもかかわらず、鶴見を京都大学の教員に採用してしまう。それを可能にしたのは、  
鶴見の学問的才能であったし、それを見抜く桑原の見識であった。チャンス（「機会」）を逃さない  
のも、あるつき合いをつづけられる（「形成する」）のも、その人物の才能、才覚、人格による。  
鶴見は「機会」を逃さず、「形成」を可能にするものを溢れるほど所有していた。

このことは『思想の科学』に参加することになるおおくの人材が証明している。たとえば梅棹  
忠夫との関係は鶴見の京大時代にはじまる。当時、梅棹は京大理学部の大大学院特別研究生だった。  
ふたりは大学ちかくの喫茶店であきずに話をする。やがて梅棹は『思想の科学』に「アマチュア  
思想家宣言」を掲載することになるが、これは『思想の科学』のその後を考えるうえで貴重な論  
考だった。

竹内好、久野収、藤田省三、日高六郎、作田啓一、多田道太郎、さらには加藤周一、谷川雁、  
吉本隆明、そして安田武、山田宗睦、その他書ききれないほどおおくの知的人材とのあいだに形  
成された鶴見の社交資本は、鶴見の才能と見識、人格が可能にしたものだった。もちろんこれが  
維持されたということは、相手方の才能と見識、人格もまた優れていた証拠である。

紙幅も尽きようとしている。最後に「賦与する社交資本」について簡単にまとめておきたい。

30) 丸山真男「同人結成のころのこぼれ話」（安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』、  
久山社、1992）、200頁。

31) 鶴見俊輔『期待と回想』、54-55頁。

## 賦与する社交資本

ここで述べる「賦与する社交資本」とは、鶴見との関係を維持することによって、その人物に社会的便宜があたえられるような、そのような社交資本のことである。これはつぎの二例をあげれば容易に理解されるだろう。

評論家上坂冬子の出発点は思想の科学研究会だった。高校を卒業してトヨタに就職し、「何かを求めてあえいでいた二十歳<sup>32)</sup>」の上坂は、思想の科学研究会に参加する。やがてかの女は会社での「労働争議の風景」を研究会で発表する。これが『思想の科学』に連載されることになるのだが、さらにこの連載は単行本『職場の群像』として刊行されるのである。こうして評論家上坂冬子が誕生する。『思想の科学』への連載は1954年、ちょうど『思想の科学』が中央公論社から刊行されはじめた頃のことである。

同じことは、評論家佐藤忠男についても言える。新潟の高等小学校を卒業し、国鉄職員、電電公社員などをしながら定時制高校を卒業した佐藤は、1954年、『思想の科学』に「任侠について」という論考を発表する。この作品がユニークな日本人論として注目をあび、佐藤はさらに大衆映画の魅力を論じた『日本の映画』でキネマ旬報賞を獲得する。こうして佐藤は映画評論家としてデビューすることになる。のちに『思想の科学』の編集長をつとめることになる佐藤は、『思想の科学』が育てた市井の研究者であった。

上坂と佐藤のあいだには共通点がある。それは、かれらがともにアカデミズム出身の知識人ではなかったということである。かれらは「ふつうの人びと」であった。しかし「ふつうの人びと」が思想をになうこと、「ふつうの人びと」の中にこそ思想があること、これは鶴見が一貫して語り、追い求めてきたことであった。1946年12月にはすでに、思想の科学研究会は「ひとびとの哲学」についての研究をはじめていたのだった。「ふつうの人びと」に思想の原点をもとめること、これは戦前の知識人に絶望した鶴見にとって思想的希望であり、戦後を生きようとするかれの思想的マキシムでもあった。だから、上坂と佐藤は、いわば鶴見の思想を証明する人物だったのであり、育つことを鶴見が希求した人物だったのである。「限界芸術」は鶴見のすぐれた芸術論であるが、それは「限界知識人」とか「限界思想」にもつながるものをもっている。上坂と佐藤は、この「限界知識人」であり、またその思想は「限界思想」であったとすることができるだろう。そして、かれらは鶴見によって「機会」をあたえられ、その後の人生を「形成した」という意味で、鶴見から社交資本をあたえられたのであった。鶴見から言えば、かれらに社会的便宜をあたえたわけであり、言いかえれば、社交資本を賦与したことになる。私が上坂と佐藤を鶴見の「賦与する社交資本」の代表例としてあげるのは、このためである。

32) 上坂冬子「初期の思想の科学と鶴見俊輔さんのこと」(『鶴見俊輔集6』月報)

と同時に注目したいことは、それが1950年代中盤にはじまったということである。もちろん、いまだ高度経済成長ははじまってはいない。しかし、上坂が労働争議をあつかい、佐藤が大衆映画をあつかって「ふつうの人びと」の思想を取りあげたことは、日本における大衆社会の到来が間近であることをしめしていた。

これはふたつの意味で重要である。第一は、思想のテーマとして大衆社会状況にある「ふつうの人びと」の心情や感性が問題になったことである。第二に、そしてこちらの方がより重要なのだが、思想の主体として「ふつうの人びと」が登場したことである。じつは、これこそ『思想の科学』が（言いかえれば、鶴見が）狙っていたことなのである。

上坂も佐藤も生まれはともに1930年である。かれらはいわば戦中派であり、いまだ戦後教育の恩恵を受けられなかった世代に属する。だから学歴も高校までで終わっている。かれらはともに自分が経験したこと、見た（観た）こと、感じたことを基礎にすえて思索にはいる。そして、そのような行為が思想へと上昇してゆく。これは、戦前の日本にはなかった知のかたちであり、頑迷なアカデミズムをこえる力をもっていた。そのような人物が思想の主体として登場してきたことの社会的意義はおおきい。そして、かれらの後には戦後教育の恩恵をうけて育った世代がつづくのである。しかもそれは、高度経済成長によって大量に可能になってゆく。このような時代的背景をうけて、『思想の科学』は上坂、佐藤につづく多くの「ふつうの人びと」の思想を紹介し、育成し、世に問うことになるのである。むろんそれは、同時に鶴見俊輔が希望した思想の民衆化の過程の進行でもあったのである。第二の側面のほうが重要であると言ったのは、この意味である。

このことを文化的支配階級概念とからめて考えればどうなるか。それは日露戦争までに完成された知的社会層の崩壊過程だったかもしれない。鶴見じしんは、この世代に属している。鶴見は、明治後期に完成された文化的支配階級の再生産過程の恩恵にだれよりもおおく浴してきた。しかし、その鶴見はこの階級の支配性と脆弱性をだれよりも知悉していた人物でもあった。それだけに鶴見は、この階級に反抗し、この階級の文化的・思想的基盤を崩壊させることに力をそそいだ。「ひとびとの哲学」とは、この階級にたいするひとつのアンチテーゼだったとも考えられる。さらに敷衍していえば、『思想の科学』の隠された使命とはここにあった、とさえ言えるかもしれない。しかも時代状況は鶴見や『思想の科学』の姿勢を援護するように動いたのだった。高度経済成長は大量の「ふつうの人びと」に思想の機会をあたえたという意味でなによりも有利な社会状況をもたらしたのである。

もちろん、ここで述べている文化的支配階級の歴史的推移については、いまだに仮説の域にとどまっている。さらなる論考と実証が必要となることは言うまでもない。以上の考察は、そのためのあくまで準備作業である。

〈資料：鶴見俊輔の人的ネットワーク〉（中間報告）

以下は、鶴見俊輔と関係のあった人物をまとめた。『鶴見俊輔集 12』巻末の「人名索引」を基礎としたが、ここにあげられている人物は鶴見の人的ネットワークのほんの一部にすぎない。重要な人物がまだ取りあげられていないことを承知している。今後、より完璧な資料を作成する予定である。

リストは鶴見が直接に会ったことのある人物が中心になっているが、しかし、それに限定していない。というのは、かれの「社交資本」の豊かさは、一部は明らかに祖父後藤新平、父鶴見祐輔の人的ネットワークを受け継いでいるからである。

直接会ってはいないと思われる人物については、☆印を付した。会っているかもしれない人物については、★印を付した。

「→」は、その人物について鶴見がふれた作品である。

〈あ〉

阿伊染徳美：1970年頃、「記号の会」で出会う。岩手県の中学校教師。日本文化の（鶴見にとっての）新しい姿を教える。著書『わがかくし念仏』、「わがへらめき」→「戦時期日本の精神史」,「私の地平線の上に」

青地 農(滋)：後藤隆之助が創設した「昭和塾」の第一回生。鶴見が最初の漫画論「物語漫画の歴史」(1949)を発表した雑誌『世界評論』の編集長。→『転向』

明石静子：灯台社明石順三夫人。1972年7月、鹿沼に訪ねる。→「明石順三と灯台社」

赤瀬川原平：漫画家、小説家。60年代にネオ・ダダイズム・オルガナイザーを結成。無意味な建造物や物体を「超芸術トマソン」と名づけて興味をもち、「路上観察学会」を結成。→「漫画の戦後思想」, 対談「子どものオシッコ」

秋田 実：漫才作家。漫才のタネについて直接話を聞いている。→『太夫才蔵伝』など。

秋山 清：アナキズム運動家。『共同研究 転向(中)』に参加,「アナキスト」の項を執筆。石川三四郎や辻潤について鶴見に伝えている。→「方法としてのアナキズム」,「石川三四郎」など。

秋吉和夫：筑摩書房編集者。第一期『現代漫画』の編集を担当, 鶴見は秋吉から漫画の見方を教えられることが多かった。→「漫画の戦後思想」,「主に読者として」

葦津珍彦：天皇制支持者で、そのことばに耳をかたむけたいと思う人のひとり。市井三郎が『思想の科学』に連れてきた。対談「尊皇攘夷とは」がある。→「私の地平線の上に」,『期待と回想』など。

足立巻一：詩人、小説家。父は『二六新聞』同人の足立菰川。『新大阪新聞』につとめながら、児童詩の雑誌『きりん』編集にたずさわる。この雑誌は児童詩運動の分野でおおきな足跡を残している。立川文庫の研究は有名。思想の科学同人。

雨宮一郎：数学者。東京府立高等学校尋常科の同級生。雨宮一郎「中学時代の思い出」(『鶴見俊輔集 7』月報)参照。

〈い〉

いいだもも：小説家、社会運動家。「わたしは、いいだももとわりあいつきあいがある、いいださんは回転が速くて好きなんだけど」と鶴見は語っている。→真下信一との対談『『世界文化』のリズム』など。

飯沼二郎：農業経済学者、京都大学人文研究所をへて京大名誉教授。65年以降平連に参加。鶴見は飯沼が主宰していた雑誌『朝鮮人』の同人となり、83年から発行人となっている。対談「在日を生きる」があ

## 原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

- る。飯沼「鶴見さんの伸びやかな世界」（『鶴見俊輔集8』月報）参照。→「私の地平線の上に」
- 池田成彬：政・財界人。自由主義教育の洗礼を高田早苗、坪内逍遙、高橋是清からうける。慶應義塾からハーヴァードに入学、卒業。ジェイムズと交わる。三井銀行に入社し三井改革をおこなう。日銀総裁、第一次近衛内閣で蔵相兼商工相、近衛を支えた自由主義者のひとり。鶴見は1948年4月15日、丸山、武谷、南とともに、池田から聞き取りを行っている。→インタビュー「池田成彬氏に聞く」、『転向』など。
- 石川三四郎：アナキスト思想家。大宅壮一、埴谷雄高などにも影響を与える。鶴見は昭和13年ころ石川の記事（「潮の干満」）にふれ、戦後、手紙を書き、昭和21年7月18日に会いに行っている。石川の「土民主義」は鶴見に大きな影響を与えたと思われる。初期の『思想の科学』の集会にいく度か石川は参加している。鶴見が「先生」と呼ぶ、数少ない人物。→『転向』、『戦時期日本の精神史』、「石川三四郎」、「私の地平線の上に」など。
- 石牟礼道子：作家、水俣実務学校卒。谷川雁らと『サークル村』に参加。同誌や『思想の科学』などに南九州の下層民の魂と生活を書く。水俣病患者の苦悩を描いた『苦海浄土』がある。鶴見との出会いは、1962年、『思想の科学』の移動編集で鶴見が熊本を訪れたときだった。谷川に紹介される。石牟礼「生命の賑わいとかなしみ」（『鶴見俊輔著作集』月報3）参照。
- 石本 新：記号論理学者、政治家加藤シヅエの長男。鶴見が中学校を二年でやめて家にこもっていたころ、年長の友人である石本にクロボトキンの『ある革命家の思い出』をすすめられる。戸坂潤の『日本イデオロギー論』をすすめ、鶴見にプラグマティズムを最初に紹介したのも、石本だった。→「私の地平線の上に」など。
- 石本恵吉★：石本新の父、加藤シヅエの最初の夫。男爵。新渡戸稲造の愛弟子。息子新と鶴見との関係は、鶴見祐輔と石本恵吉の大学時代の関係が背景となっていたと思われる。
- 石山幸基：共同通信社記者。「オーウェル研究会」の仕掛け人。カンボジアで取材中に病死。
- 市井三郎：哲学者。鶴見との出会いは、『思想の科学』創刊号の感想を書いた手紙をもって市井が編集室を訪れたことから始まる。市井は『思想の科学』の同人第1号となる。1956年、中村秀吉、石本新、上山春平、鶴見俊輔とともに思想の科学研究会の内部に論理学共同研究のサークルをつくる。→「私の地平線の上に」、「哲学者市井三郎の冒険」（『市民の論理学者・市井三郎』）など。
- 伊藤光晴：経済学者、東京商大（現・一橋大）卒。都留重人の影響をうける。現実経済の分析に精神的に取り組んでいる。→「柳宗悦」、対談「老いの発見」
- 井上ひさし：小説家。鶴見は、「井上ひさしのパロディー、小説には……自覚された努力としての江戸文化のとりもどしがある」と評価している。→「井上ひさしの文章作法」、井上との対談「笑う透明人間」など。
- 井上摩耶子：カウンセラー。「オーウェル研究会」の仕掛け人。
- 岩永裕吉☆：父祐輔の恩師新渡戸稲造の愛弟子。デュイイ批判（「デュイイ教授と語る」）をおこなう。しかし岩永は、祖父後藤ともつながっている。明治16年、後藤を内務省衛生局に招いたのは長与専斎であったが、長与の四男が岩永である（末っ子が白樺派の長与善郎）。岩永は近衛文麿の流れをうけて、同盟通信社をつくる。→『デュイイ』、『転向』、『期待と回想』
- 〈う〉
- 植草甚一：エッセイスト。東宝入社、プログラムや字幕スーパーの作成にたずさわる。映画評論、小説の翻訳などを手がけ、またモダンジャズにのめり込み、ジャズ・エッセイも書いた。昭和初期のモダン・ボーイであった。1977年初夏、鶴見は暁教育出版の座談会で黒田初子とともに植草甚一と対談している。→「散歩の名人、その軽い足どり」など。
- 上野博正：医師、全共闘運動の火つけ役。第二次記号の会（1955～1960）、第三次記号の会（1961～）のメンバー。→「素材と方法」
- 上原 隆：映画監督。1990年、『「普通の人」の哲学』を書く。出版後に京都で会見している。上原「会見

記」(『鶴見俊輔集1』月報)参照。

上山春平：哲学者。鶴見との初めての出会いは、上山が訪ねていったものだった。上山は書いている、「私は鶴見さんにはじめてお目にかかったのは、1950年の晩秋でした。そのとき、京大の本部構内の正門附近にあった古ぼけた木造二階建ての人文科学研究所の一室に、鶴見さんを訪ねたのです。……用件は……パースの論文集の借用を御願ひするにあったのです」(『鶴見俊輔著作集2』月報)。上山は初期『思想の科学』の重要な書き手だった。対談「手づくりのカテゴリー表」がある。

梅棹忠夫：民族学者。京都大学時代に知り合う。最初の出会いは梅棹が理学部動物学の大学院特別研究生のころ。京大の近くの進々堂でよく一緒にコーヒーを飲み話した。梅棹が『思想の科学』に書いた「アマチュア思想家宣言」は重要。→「梅棹忠夫頌」など。

梅原 猛：哲学者，作家。京大卒。国際日本文化研究センターの設立に尽力し，所長。靈魂論のさきげけ。アイヌ語や沖縄語の研究を通じて日本文化の重層性に注目した。思想の科学会員。

〈え〉

胡子雅男・中川文夫：岩国基地の近くに反戦喫茶店「ほびと」をつくる。→「幻獣製作術」，「私の地平線の上に」

海老坂武：フランス文学者，東大仏文科卒。鶴見俊輔論を『雑種文化のアイデンティティ』に書く。

エリセーエフ，S：アメリカの日本学者，夏目漱石門下。ロシアに生まれ，ラリンスキー大学，ベルリン大学，東京大学（外国人として初の卒業生）に学びパリ大学高等研究院教授，ハーヴァード大学教授となる。鶴見はヤング一家のパーティでエリセーエフに会っている。→「ヤングさんのこと」

遠藤 賦：アナキズム活動家。鶴見は石川三四郎を訪ねたときに，遠藤に会っている。その後，石川の出版記念会でも会っている。妻は詩人の松木千鶴→「二人の主婦の詩の中から」

〈お〉

大江満雄：詩人，小学校卒業後独学。キリスト教とマルクス主義の架橋をこころみた。結核やハンセン病患者の死の運動に尽力した。敗戦後早いころ，鶴見は大江に誘われて，ハンセン病療養所の雑誌の文章の選評をしている。→「私の地平線の上に」

大熊信行：経済学者，評論家。東京高商（現一橋大）卒。戦前，「配分原理」をもとにした『経済本質論』を著し，戦時経済の進行とともに，大日本言論報国会の理事となる。戦後公職追放。のちに，富山大教授などを歴任。鶴見は戦時中，大熊を「総力戦国家の理論家」とみなしていた。しかし，大熊の戦争責任についての「反省」を高く評価している。→「転向」，「なくなった雑誌」

大河内光孝夫妻：ある子爵家の妾腹の息子，アメリカに渡り，サーカス団に入る。鶴見とは，メリーランドの収容所で知り合い，同じ交換船で帰国した。「横浜事件」で突然拘束され，拷問をうける。→「革命について」，「戦時下日本の精神史」

大沢正道：大沢がまだ学生のころ，石川三四郎の家で出会う。大沢は一貫して石川を支えていた。平凡社の編集者。また『オーウェル著作集』の企画を鶴見のところへ持ってきた一人が大沢であった。また，『転向』の出版にかかわる。著書『石川三四郎』など。→「私の地平線の上に」

太田雄三：マッギル大学史学科教授。鶴見のマッギル大学での講義を聴講。「戦時期日本の精神史」に太田の内村鑑三についての言及が引用されている。

大西良慶：僧侶，清水寺官長。社会福祉事業に力をそそいだ。金東希事件の際，鶴見は大西と会い，清水寺の檀家であり，親交のあった法相田中伊左次に手紙をしたためてもらっている。→「私の地平線の上に」

大野 力：評論家，桐生高専卒。中学教師，業界紙記者などをし，戦後日本の経営と労働を現場からレポートする現場主義のスタイルをつくった。転向研究会に参加。自主刊行となった『思想の科学』をささえる。→「戦時期日本の精神史」

大宅壮一：評論家，東大社会学科中退。生家は造り醤油業。鶴見は海軍嘱託としてインドネシアにいたとき

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

（1943年）、大宅と会っている。大宅は陸軍側の報道班員だった。大宅について鶴見は『転向』のなかで「後期新人会員」の項で論じている。→『共同研究 転向』など言及多し。

小笠原信夫：松下電器品質技術副参事。『期待と回想』で聞き手を引き受ける。→『期待と回想』

岡田誠三：小説家、直木賞作家。朝日新聞学芸部記者時代に、京大にいた鶴見をいく度も訪れている。代表作に『定年後』があり、鶴見は中央公論社刊の文庫本に「解説」を書いている。この「解説」が→「生者・死者兼帯の複眼」、対談「定年とは」

岡部伊都子：随筆家。大阪相愛高女中退。『おむすびの味』で随筆家としての名をえて、以後著作は80冊をこえる。初めての出会いは、『声なき声の会』の講演会が主宰した鶴見の講演を岡部が聴きに行ったことから始まる。1962年頃のこと。金東希事件の時、鶴見は岡部、橋本、和田とともに法相田中伊左次に会見している。岡部の『美を求める心』を鶴見は書評している。→「扇よりも盆のよな境地を」、「私の地平線の上に」

長田 弘：詩人。早稲田大学卒。〈双書・20世紀紀行〉（全12巻、晶文社）の巻末に、旅についての本を話題にして対談する。『旅の話』参照。

小田 実：小説家。小田との関係が密接になるのは、「ベ平連」の運動によってだった。「声なき声の会」の高島通敏から声がかかり、久野収に相談して、北爆反対の運動のリーダーを小田に依頼する。→「私の地平線の上に」など。

乙骨淑子：児童文学者。桜陰高女専攻科卒。56年、柴田道子と「こだま児童文学会」に参加。作品に『びいちゃあしゃん』など。「声なき声の会」のメンバーであった。鶴見は乙骨を早くから知っていたし、もともと乙骨の父村谷荘平と知り合いだった。→「老いへの視野」

〈か〉

掛川恭子：児童文学者。京大在職中に鬱病に罹ったときに、鶴見は東京の金町に下宿した。恭子はその家の娘。妹貞子が鶴見夫人。掛川「金町と俊輔さん」（『鶴見俊輔集3』月報）参照。

笠原芳光：宗教思想史研究家、同志社大学卒、京都精華大学学長。同志社大学在職中に宗教主事であった笠原と知り合う。このとき、同じく宗教主事だった河崎洋子とも知り合う。灯台社についての笠原の示唆は重要だったと思われる。→「明石順三と灯台社」

粕谷一希：編集者、東大法学部卒。中央公論社版『思想の科学』の編集を担当する。鶴見とは小さな論争がある。→粕谷「戦後史の争点について：鶴見俊輔氏への手紙」、鶴見「戦後の次の時代が見失ったもの：粕谷一希氏に答える」

加太こうじ：紙芝居作家、評論家。小学校上学年から紙芝居を描きはじめた。『黄金バット』は代表作。41年から葛飾区金町に住む。この金町は戦後の紙芝居復興の拠点となり、白土三平、水木しげるなどが加太の指導をうける。59年に「大道の芸術紙芝居」を『思想の科学』に寄稿し、これをきっかけにして著述業に転身した。80年から10年間、思想の科学社の社長をつとめた。鶴見は59年2月にはじめて加太に会っている。ただ、鶴見も金町に下宿していたことがある。なにかの因縁かもしれない。→言及多し。

片桐ユズル：詩人、評論家。早大大学院卒。高校教師をへて、フルブライト留学生となり、サンフランシスコ州立大でまなぶ。60年代後半からのフォーク運動の指導者。第二次「記号の会」のメンバー。この会の成果として片桐の『意味論入門』がある。鶴見は片桐の主宰する雑誌『POETRY』に「人形の台詞」（1955）を発表している。→「記号の会について」

加藤シヅエ★：女性解放運動家、政治家。男爵石本恵吉と結婚。長男は鶴見の友人となった新。19年渡米。M.サンガーと出会う。帰国後、産児調整のための運動に奔走。加藤勘十と再婚。戦後はGHQの非公式顧問となる。社会党より国会議員となる。

加藤周一：評論家、作家。東大医学部卒。「マチネ・ポエティック」のメンバー。『雑種文化』（1956）はおおきな反響をうんだ。海外のおおくの大学で教鞭をとっている。鶴見は「戦後三十年余り、私は加藤周一の読者としてすごして来た。……同席したことは、かぞえるほどしかない。……私の日常のつきあいの圏内

にいない人である」と書きながら、他方「戦後四十年間でいちばんたくさん本を教えてくれたのは加藤周一さんです」とも書いている。→「加藤周一の流儀」,「日本のマンガの指さすもの」など言及多し。

加藤典洋：明治学院大学教授。1979年、鶴見がカナダのマギル大学の客員教授として「戦時期日本の精神史」と「戦後日本の大衆文化史」を講義をしたとき、「麗」聴講生として出会う。加藤「誤解される権利」(『鶴見俊輔集8』月報)参照→「図書館と私」

金井佳子：スナック業。ベ平連のピラを手にしたのをきっかけに、1966年6月29日、アメリカが北爆をした日にアメリカ大使館前に行き、鶴見と出会う。「非暴力反戦行動」を渡辺一衛や市井三郎と実行する。金井「座りこみ」(『鶴見俊輔集10』月報)参照。

上坂冬子：作家。高校卒業後、トヨタ自動車入社。有名な労働争議に出会う。帰郷運動のオルグに思想の科学研究会を紹介され、参加。研究会で争議の様子を報告。これをもとにして『思想の科学』に連載。思想の科学第一回新人賞を受ける。佐藤忠男、加太こうじとならんで鶴見が育てた「思想の科学的」知識人。上坂「初期の思想の科学と鶴見俊輔さんのこと」(『鶴見俊輔集6』月報)参照。

神島二郎：政治学者、東大卒。丸山真男に師事。日本近代化と天皇制ファシズムを支える民衆意識の分析にとめる。鶴見は神島の『日本人の結婚観』をしばしば引用している。また『日本の百年』を共同編集している。神島が『思想の科学』に最初に執筆したのは「庶民の中の英雄」(59年10月)だった。対談がある。→対談「結婚史之現在」

亀山 巖：現代風俗研究会の吉野山遊山の際に知り合う。鶴見はその老いの形にこころを動かされている。→「楽園追放異説」

カルナップ, R：ドイツの哲学者。大戦時、アメリカに逃れてシカゴ大学教授。鶴見はカルナップの講義(「分析哲学入門」,「経験論の原理」)を聴いている。→『期待と回想』

河合隼雄：臨床心理学者。1978年頃、漫画についての評論の企画で編集者を介してはじめて会う。共同座談『時代を読む』,共同編集『倫理と道徳』などがある。無意識という「あいまい」な領域に取り組む河合の学問は鶴見を惹きつけたと思われる。河合「はじめてお会いしたとき」(『鶴見俊輔集2』月報)参照。→『期待と回想』

菅 孝行：評論家。東大文学部卒。1980年、『鶴見俊輔論』を書く。83年秋、鶴見からかなりの時間をかけて聞き取りをしている。菅「或る方法の起源について」(『鶴見俊輔集1』月報)参照。

<き>

北沢恒彦：編集グループ「シュアール」主筆。「家の会」,「文体研究会」メンバー。『期待と回想』で聞き手を引き受ける。著書『家の別れ』。→「家の会と二五年」,『期待と回想』

北嶋基子：声楽家。東京高等師範学校付属小学校時代の同級生。北嶋「いじめっ子の彼」(『鶴見俊輔集8』月報)参照)

キム・タルス(金達寿)：小説家。韓国慶尚南道生まれ、日大芸術科卒。12歳の頃から工場で働き、以後底辺労働者として職を転々とする。雑誌『民主朝鮮』の編集、長編『玄界灘』などを書き、民族運動に加わる。鶴見は韓国・朝鮮の文学を語るときに、しばしばキムに言及する。金芝河の救援運動のさい、鶴見はキムとともに断食をしている。→「私の地平線の上に」など。

<く>

串田孫一：哲学者、エッセイスト。東大文学部卒。元東京外大教授。鶴見が串田に会ったのは二度ほどしかない。しかし鶴見は、「私の歩いてきた道すじは、同時代に串田孫一、福田定良の両哲学者の歩いてこられた道に近い。自覚してではないが、両先達のあとを歩いてきたことになった」と述べている。→「著者自身による解説」(『鶴見俊輔集6』)

工藤直子：詩人、コピーライターとして博報堂で働く。はじめて鶴見と会ったのは、鶴見が河合隼雄と対談をした日だった。その後、鶴見自身が工藤と対談している。工藤は漫画についての情報を鶴見にもたらず

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

よき先生となった。工藤「鶴見さんの窓」（『鶴見俊輔集7』月報）参照。→「昭和マンガのヒーローたち」, 対談「夫婦と家をめぐる」

久野 収：哲学者，京大哲学科卒。戦前から一貫して平和運動をになう。中井正一らと創刊した『世界文化』のメンバー。鶴見との関係はふかい。共著『現代日本の思想』, 『戦後日本の思想』などがある。→言及多し。

熊野清樹：鶴見が13, 4歳の頃通っていた教会の牧師。鶴見とキリスト教の結びつき（思想的ではなく）は、母愛子がクリスチャンであったことによるのだろう。→「私の地平線の上に」

黒田初子：登山家，料理研究家。東京女高師（現・お茶の水大）卒。夫の黒田正夫は工学博士で雪と氷の研究で知られた。夫の指導により登山とスキーに開眼する。大正時代のモダン・ガールであった。1977年初夏，鶴見は暁教育出版の座談会で植草甚一とともに黒田と対談している。→「散歩の名人，その軽い足どり」

クワイン，W：数学者，記号論理学者。鶴見のハーヴァード時代の2年目からチューターとなっていくつこの本を読んだ。参考までに，鶴見がハーヴァードで聴いた講義者には，バートランド・ラッセル，ルードルフ・カルナップ，タルコット・パーソンズ，ポール・スウィージーなどがいる。戦後日本の哲学・社会科学界で注目された科学者の講義を鶴見は聴いていたことになる。→「アメリカ哲学」, 「デューイ」など。

桑原武夫：フランス文学者。鶴見を京都大学に招聘した人物。出会いのきっかけは，『思想の科学』（鶴見の「ベシク英語の背景」）の感想と購読申し込みを桑原が手紙で伝えてきたことだった。最初に会ったのは1948年。その後の関係はふかい。「私はその学恩に負うところが大きい」, と鶴見は書いている。→『期待と回想』など。

〈こ〉

小泉英政：旧姓松浦，三里塚闘争に加わり，やがて小泉よねの夫婦養子となって三里塚内部の人間として活動。もともと金井佳子などが始めた「非暴力反戦行動」で鶴見と知りあう。小泉「たいらな道」（『鶴見俊輔集12』月報）参照。→「私の地平線の上に」

後藤和子☆：鶴見の祖母，後藤新平の妻。安場保和の次女。

後藤宏行：転向研究会，初期からのメンバー。『転向』では「総力戦理論の哲学：田辺 元，柳田謙十郎」を執筆。『転向と伝統思想』（思想の科学社，1978）がある。

後藤隆之助：政治家，京大卒。近衛文麿のブレーン。昭和研究会をつくる。鶴見が後藤の名前を知るのは小学校時代に読んだ『一高魂物語』においてだったが，実際に会うのは戦後，転向研究を始めてからだった。→『転向』

小中陽太郎：作家。ベ平連世話人として活動する。

小林トミ：中学校教師，画家，児童文学作家。東京芸大卒。最初の出会いは，1958年，岡本太郎主宰の現代芸術の会に鶴見が講師としてやってきたとき。小林はこの会の中心的メンバーだった。「声なき声の会」メンバー。『思想の科学』内のサークル「主観の会」に参加していた小林の発言からこの「会」は生まれた。小林「鶴見さんと私」（『鶴見俊輔集11』月報）参照。

〈さ〉

斎藤 博：元アメリカ大使。1938年正月，鶴見がアメリカに滞在したとき大使公邸に滞在した。武者小路実篤，志賀直哉の友人。→「独行の人」

斎藤 実★：朝鮮総督，内大臣，首相をつとめる。二・二六事件で暗殺される。水沢藩の出身で，後藤新平とは幼いころからの知り合いであった。

坂西志保：評論家，元バージニア大学教授。アメリカ議会図書館東洋部主任（1930-42）。1942年6月10日，鶴見が交換船でアメリカを離れるとき同船していた。これがはじめての出会いだが，しかし坂西の人物については，父祐輔や斎藤博駐米大使から聞かされていた。武谷三男を鶴見（和子）に紹介し，『思想の科

- 学』創刊のきっかけを作った人物。→「独行のひと」
- 作田啓一：社会学者，経済学者作田壮一の長男，京大社会学科卒。桑原武夫が主宰した京大人文研における文学理論の共同研究会で出会う。→「共同研究の方法」
- 佐光紀子：外資系の会社を経て，フリーで翻訳やマーケティング調査をおこなっている。対談がある。→「家庭に何を求めるか」
- 佐々木秀一：東京高等師範付属小学校の校長。現東大総長高階秀爾の祖父。鶴見は佐々木の著書『黒偉人物語』を読んでいる。デューイとも会見したことのある佐々木のことを鶴見は，日本教育界のプラグマティズムの実践者と評している。→「私の地平線の上に」，『デューイ』
- 佐藤忠男：映画評論家。佐藤は新潟で工員をしながら，映画についての短いエッセイなどを映画雑誌に投稿していた。そして『思想の科学』に「任侠について」という評論を投稿する。それに鶴見は長い（便せん10枚ほどの）感想を書き送る。こうして関係がはじまる。佐藤は，上坂冬子とともに，鶴見が育てた市井の思想家である。→「プラグマティズムの発達概説」
- 佐野 碩★：東大新人会メンバーで，日本プロレタリア演劇同盟の書記長。「インターナショナル」の訳詞者。メキシコで死んだ。鶴見にとっては，母方の従兄弟（母愛子の姉静子の息子）になる。碩の弟新は，鶴見の幼い頃の遊び友だち（悪友）であった。→『転向』，『グアダルベの聖母』，『期待と回想』
- 佐野 学★：昭和初期の日本共産党指導者。東京帝国大学法学部卒業。早稲田大学講師。22年共産党に入党し常任幹事。33年鍋山貞親と共同で転向声明を発表。佐野碩の叔父にあたり，鶴見の遠縁。鶴見にとって「転向」とは（父の場合も当然のことながら）身近な問題であった。→『転向』

〈し〉

- 椎名悦三郎★：政治家。岩手県水沢の出身。後藤新平の甥。
- ジェイガー，G：カルナップの弟子，ゼルズニックの妻。鶴見がゼルズニックと会ったことを契機として，『エンクワイアリー』に掲載されていたジェイガーの「うまれたままの人の哲学」（デューイ論）を『思想の科学』（第1号）に翻訳掲載することになる。→「私の地平線の上に」
- 塩沢由典：大阪市立大学経済学部教授。ベ平連時代からのつき合い。「文体研究会」メンバー。『期待と回想』で聞き手を引き受ける。
- 志樹逸馬：長島愛生園の詩人。戦後十年ほどして文通がはじまり，鶴見は愛生園に会いに行っている。→「図書館と私」
- 柴田道子：児童文学作家，社会運動家。共立女子大卒，60年安保時の共立女子大ブントのメンバー。長野ベ平連を結成。被差別部落の聞き書き『被差別部落の伝承と生活』を書く。狭山裁判に深く関与。→「体験をきりひらこうとする努力」，「幻獣製作術」
- 芝地則之：同志社時代の鶴見ゼミの学生。ハンセン病回復者ホーム建設のリーダーだった。この運動では，谷川雁の助言を受けている。フレンド派国際労働奉仕団のメンバー。1989年没。→「私の地平線の上に」
- 渋谷定輔：詩人，農民運動家。南畑高等小学校卒。貧しい小作農の長男として生まれ，過酷な農業労働をしながら詩や生活記録を書く。農民運動に参加し，37年，治安維持法違反容疑で逮捕される。戦後は，地域の市民運動・文化運動に活躍した。妻は渋谷黎子（旧姓池田ムメ）。鶴見は渋谷黎子の『この風の音を聞かないか』を書評している。→「本と人と」
- 嶋中農也★：嶋中鵬二の二歳違いの兄。父嶋中雄作の跡をついで中央公論社に入社するが病死。鶴見は小学校二年のとき，農也の作文を読んでこころを動かされている。→「好みの問題」
- 嶋中鵬二：出版人。東大独文科卒。鶴見の小学校時代の同級生。中央公論社長だった嶋中雄作の次男。明大，東洋大講師をつとめたが，父の死後中央公論社に入社，後に社長。掲載した「風流夢譚」をきっかけに右翼の襲撃をうけ，その後出版していた『思想の科学』天皇制特集号を無断裁断する。→「素材と方法」，「私の地平線の上に」
- 嶋中雄作★：出版人。早大哲学科卒。島村抱月らの紹介で反省社（後の中央公論社）に入社。『婦人公論』

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

- を創刊し主宰。晨也、鵬二の父。中央公論社の2代目社長。兄が社会運動家の嶋中雄二。
- しまねきよし：思想史家。本名嶋根清。東京外大卒。取手高校教諭のかたわら思想の科学研究会の転向研究グループに属し、『転向』に妹尾義郎、神山茂夫らについて執筆。65年、『思想の科学』編集長。
- シュレジンガー、A：アメリカ時代の俊輔の身元引受人。ハーヴァード大学歴史学教授。祐輔の友人で、俊輔の留学前にすでに鶴見家を訪ねてきていた。俊輔がFBIに逮捕された後の公聴会では特別弁護人を引き受けた。→「北米体験再考」、『絵葉書の余白に』
- シュレジンガー、Jr., A：シュレジンガー、Aの息子。ハーヴァード大学歴史学教授。ケネディ大統領の時の補佐官。後に俊輔はシュレジンガー、Jr.と日本で再会している。
- 白鳥邦夫：サークル活動家。東大卒、小学校教師、高校教師をつとめる。生活記録サークル「山脈の会」をつくり活動。鶴見はサークル運動について白鳥からおおきな影響をうけている。→「世代から世代へ」
- ジン、H：アメリカ史学者、劇作家。ベトナム戦争反対の運動をおこなう。ペ平連の招待（小田実の発案）で来日、このとき鶴見と会う。著書『SNCC』（邦題『反権力の世代』、合同出版、1967）がある。ジン「鶴見俊輔」（『鶴見俊輔集6』月報）参照→「北米体験再考」
- 新村 猛：フランス文学者、『世界文化』同人。中井正一と交わる。鶴見は中井についての情報を新村からも得ている。→「私の地平線の上に」

〈す〉

- スウィージー、P：現代アメリカの理論経済学者。主著『資本主義発展の理論』がある。また『マンズリー・レビュー』を編集した。鶴見はハーヴァードでスウィージーの社会主義経済理論の講義を聴いている。→『期待と回想』
- 末盛千枝子：「すえもりボックス」代表。対談がある。→「家庭に何を求めるか」
- 杉山龍丸：杉山泰道（夢野久作）の長男。鶴見の夢野久作への関心はふるく、子どもの頃にさかのぼる。夢野論（「ドグラマグラの世界」）を書いたのは1962年であった。その頃から夢野の家族への関心は持続しており、この夢野論が契機となって杉山龍丸と会う。20年におよぶ交流の結果、『夢野久作』が生まれた。龍丸はその祖父（杉山茂丸）の縁で葦津とも関係がふかい。→「五十数年前の本と再会」、『夢野久作』
- 鈴木 均：編集者、評論家。元『世界評論』（青地農の項参照）の編集者で、このとき書評欄担当グループの都留重人、鶴見和子、南博、丸山真男、鶴見俊輔などと接する。鶴見との出会いはこれをきっかけにしている。その後平凡社に移り、『共同研究 転向』を担当する。鈴木「長いおつきあいでござんす」（『鶴見俊輔著作集1』月報）参照。
- 須田剋太：洋画家、熊谷中卒。41年より関西に住み、戦後、奈良に在住の志賀直哉を中心とした「天平の会」に参加。司馬遼太郎の「街道を往く」の挿絵を担当。講談社出版賞。鶴見は須田と親しくしており、雑誌『朝鮮人』の表紙を須田は描き続けた。→「講演 マンガの歴史から」
- 隅田好枝：灯台社明石順三の養女。1972年7月、鹿沼を訪ねる。→「明石順三と灯台社」

〈せ〉

- 瀬戸内寂聴：小説家、東京女子大卒。北京で結婚、敗戦を迎え帰国。離婚後、小説家の道にすすむ。対談がある。→対談「伝記にあらわれた女」
- ゼルズニック、P：アメリカの社会学者、政党の戦略の分析（『組織的武器』）などを行う。独立社会主義の雑誌『エンクワイアリー』を編集する。1945年秋、鶴見は占領軍の伍長として来日していたゼルズニックの訪問をうけている。夫人が、ガートルード・ジェイガー。ゼルズニック「鶴見俊輔：同情ある理解」（『鶴見俊輔集9』月報）参照。→「私の地平線の上に」

〈そ〉

- 副田義也：社会学者、東大卒。遊びから漫画、子どもなど多岐にわたる領域を研究している。対談がある。

→「老いの発見」

〈た〉

高田 宏：作家。雑誌編集者として出発する。大槻文彦を描いた『言葉の海へ』（1978）で大佛次郎賞・亀井勝一郎賞を受賞。現代風俗研究会メンバー。

高取正男：民俗史家。鶴見は高取から「形見」について教えられている。→「好みについて」

高島通敏：政治学者。転向研究会の重要なメンバー。「声なき声の会」の事務局長をつとめていたとき、北爆に反対するデモをしようと発案、鶴見に相談する。ここから「ベ平連」が生まれる。→言及多し。

竹内勝太郎☆：詩人。京都市私立基督教青年会夜学校でフランス語をまなぶ。三木露風によって象徴主義に導かれる。わが国におけるサンボリスムの最大の個性と称せられる。同人誌『三人』の創刊に指導的役割をはたし、富士正晴、野間 宏、竹之内静雄に影響を与える。志賀直哉とも交わる。鶴見は竹内に会ってはいないが、竹内の死亡を知らせる新聞記事を昭和10年に読んでいる。→「芸術の発展」、『『ヴァイキング』の源流』

竹内成明：社会学者、同志社大学教授。「オーウェル研究会」メンバー。

竹内 好：中国文学者、東大卒。東大の同期に武田泰淳がいる。魯迅研究の第一人者。53年、思想の科学研究会に参加した。鶴見は「戦後に私にもっとも大きな影響を与えた」と述べている。竹内は初めての出会いを、「復員からしばらくして、俊輔さんにオルグされて思想の科学研究会の会員になった。かれは単身、紹介もなしに有楽町の私のたむろする場所にあらわれ、私は即決で入会したように思う」と書いている（『鶴見俊輔著作集2』月報）。→言及多数。

武田清子：『思想の科学』創刊時のメンバー。初めての出会いは、鶴見が留学時代、休暇中にニューヨークの日本文化会館で図書の整理などのアルバイトをしていた時。→「私の地平線の上に」

武田泰淳：小説家、東大中退。在学中に竹内好と出会い、中国文学研究会をつくる。→「うしろめたさ、あやうさ」、対談「日本人の恋愛観」

武谷三男：物理学者。『思想の科学』創刊時のメンバー。戦前の『世界文化』の仲間であり、また「民科（民主主義科学者協会）」の創立者でもある。鶴見がマルクスを読むきっかけを作った。『思想の科学』創刊号の「哲学は如何にして有効さを取戻しうるか」は重要な論文。「敗戦直後の時期に、武谷氏に会って、論議したことが、戦後のパースペクティブをつくる上で、かけがえのない影響となってきた」と鶴見は記している。→「武谷三男の戦後の仕事」、「漫画の戦後思想」、その他言及多し。

田辺聖子：小説家。樟蔭女子専門学校卒。「感傷旅行」で芥川賞受賞。鶴見とは対談がある。→対談「男と女のあいだ」

竹之内(桑原)静雄☆：筑摩書房社長。富士正晴、野間宏と同人誌『三人』を創刊。旧姓桑原。鶴見が面識があるかどうかは不明。→『『ヴァイキング』の源流』

多田道太郎：フランス文学者。鶴見との最初の出会いは、1949年4月、多田が京大人文科学研究所の研究生に志願し、その際の英語の試験官が鶴見だった。その後ふたりの関係は密接につづいている。対談『変貌する日本人』→「私の地平線の上に」、その他言及多し。

谷川 雁：詩人、評論家。東大社会学科卒。西日本新聞社貴社時代に共産党に入党。争議を指導、誅首される。森崎和江らと『サークル村』を創刊。サークルに関して鶴見に影響をあたえる。谷川の主著『工作者宣言』は鶴見批判からはじまっている。また『原点が存在する』がある。鶴見は1958年ころ、日高六郎の研究室ではじめて谷川に会った。兄に、民俗学者の谷川健一がいる。鶴見との討論「戦後精神のゆくえ」がある。→言及多し。

〈ち〉

近角聡信：物性物理学者、父は宗教家・近角常観。東大物理学科卒。元東大物性研究所教授。鶴見とは東京府立五中時代の同級生。近角聡信「ニヒルな少年と温かい自由人」（『鶴見俊輔集3』月報）参照。

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

長 新太：漫画家、イラストレーター。絵本『おしゃべりなかまごやき』、漫画『なんじゃもんじゃ博士』がある。鶴見は岩国の喫茶店「ほっぴと」のマッチ箱イラストを長に描いてもらった。→「幻獣製作術」、河合隼雄との対談「長新太の作品」

〈つ〉

辻信一：文化人類学者。加藤典洋とともに鶴見のマギル大学の講義を聴講している。これに刺激されて「転向論の新しい地平（上・下）」（『思想の科学』、1981.5.6）を書く。この批判を鶴見は高く評価している。→「戦時期日本の精神史」

都留重人：経済学者。アメリカ留学時代に知り合う。「生涯にわたる学問上の師」と鶴見は言う。アメリカで哲学を勉強するならプラグマティズムを読むように鶴見に勧めたのは、当時ハーヴァード大学の講師だった都留である。『思想の科学』創刊時のメンバー→言及多し。

鶴見内蔵助☆：鶴見俊輔の父方の先祖。仕えていた水谷藩のお城没収の際に、浅野藩主の名代大石内蔵助と対した人物。→『絵葉書の余白に』

鶴見良憲☆：鶴見俊輔の父方の祖父。水谷勝得という旗本につかえる代官の跡継ぎ。維新後、武士身分を捨て、いくつかの工場を経営するが、貧しいなかで死んだ。→『絵葉書の余白に』

鶴見良造良直☆：鶴見良憲の父、俊輔の曾祖父。岡山県備中町布賀（黒鳥）にかつてあった黒鳥陣屋の最後の代官。→『絵葉書の余白に』

鶴見良行：元龍谷大学教授。鶴見憲（良憲の息子、祐輔の末弟）の子。俊輔の従兄弟にあたる。『思想の科学』、「ベ平連」にかかわる。大学時代の同級生に『現代の理論』の安藤仁兵衛がいる。鶴見良行「鶴見俊輔の血縁思想」（『鶴見俊輔集 10』月報）参照。

〈て〉

デウィット，B：テキサス大学物理学教授。コンコルドのミドルセックス校時代の同級生。『鶴見俊輔集 1』「月報」に寄稿している。

寺山修司：歌人、劇作家、早大中退。1954年、前衛歌人としてデビュー。60年代には前衛文化のリーダーとして若者から圧倒的に支持された。『家出のすすめ』などがある。鶴見は、たとえば寺山の流行歌分析（『誰か故郷を想はざる』）をたかく評価している。三度ほど会っている。→『隣人記』、「現代の歌い手」など。

〈と〉

ドーア，R：社会学者，ロンドン大学教授。鶴見和子を介して昭和25年，成城の自宅ではじめて会った。その後親しく交際している。ドーア『『かわりもの』の刺激効果』（『鶴見俊輔集 2』月報）参照。→「戦時期日本の精神史」など。

土居光知：元東北大学教授，英文学者，日本古典文学研究者。鶴見との縁は、『思想の科学』で日本語についての原稿を依頼したことにある。鶴見の存在を桑原武夫に教えたのは，土居だった。依頼された原稿は、『思想の科学』（1947.10）に「基礎日本語と小学校の教育」と題されて発表された。→「日本語と国際語」、『期待と回想』

東郷文彦：外交官，東大卒。58年から安全保障課長時代には，安保条約の改定交渉にかかわった。67年，北米課長。沖縄返還交渉では「核抜き本土並」という共同声明作りの実質的起草者。74年，外務省事務次官。75～80年，駐米大使。終戦時の外相東郷茂徳の娘婿。ハーヴァードの大学院生時代に鶴見が下宿していたヤング一家のところを気に入り，同じく下宿する。当時，ボストン日本人学生会の会長（鶴見は書記）→「ヤングさんのこと」，「北米体験再考」

利谷信義：法学者，東大卒。明治期の家制度をはじめ，土地・農業・司法などを近代法史と関連させて研究している。対談がある。→「家庭に何を求めるか」

富岡多恵子：詩人，小説家。大阪女子大卒。大阪の義太夫文化のなかで育つ。対談がある。→対談「強姦について」

〈な〉

中井正一：哲学者。『美・批評』、『世界文化』、『土曜日』などを発行，主論文「委員会の論理」，「スポーツ気分の構造」など。「民主人民戦線」という発想はやがて鶴見に影響を与える。「それ（民主戦線という考え方は，共同戦線に属するちがう思想傾向の尊重であり，ちがう思想傾向のもの間のまなびあいの可能性を認めていた」，また「戦後の自分の仕事は，全体として中井正一のとてのひらの中にある」と鶴見は書く（「私の地平線の上に」）。中井の仲間であった武谷三男が，中井の発想を鶴見に伝える。鶴見が最初に中井に会ったのは，京大人文研時代であり，合計三回ほどに過ぎない。→「戦後日本の大衆文化史」など。

中井猛之進：東大理学部卒。東大教授。鶴見は，海軍の軍属としてインドネシアにいたとき，擬装用植物について中井から教えを受ける。インドネシア植物園園長。鶴見の小学校の同窓生中井英夫の父。→『期待と回想』

中井英夫：小説家。東大言語学科中退。父は中井猛之進。小学校の同窓生。主著『虚無への供物』がある。中井「本物の劣等生」（『鶴見俊輔著作集2』月報）で鶴見についてふれている。→『期待と回想』

永井道雄：社会学者。東京高等師範学校付属小学校時代の同窓生。後の文部大臣。→「私の地平線の上に」，「恩人」，「素材と方法」など。

永井柳太郎★：早大卒。オックスフォード大へ留学，帰国後母校の教授に就任，社会政策および植民地政策の講座を担当。大正・昭和前期の政党政治家。鶴見の小学校時代の同窓生永井道雄の父。『転向研究（翼賛運動の設計者）』で「偽装転向」として取り上げているが，鶴見は父祐輔の転向について書きたくなかったから永井の転向について書いた，と証言している。→『転向』，『期待と回想』

中島河太郎：文学史家，評論家。東大卒。推理小説の研究・評論の分野を開拓。鶴見は1962年，中島から夢野久作の著作を借りている。→『「怪奇小説」と三代の意図』，「五十数年前の本と再会」

中島岑夫：元筑摩書房編集者。『日本の百年』，『鶴見俊輔著作集』などを手がける。「退行計画」の雑誌『展望』への掲載には，中島の力添えがあった。中島「全五巻著作集まで」（『鶴見俊輔集12』月報）参照。→「主に読者として」

永田秀次郎：内務官僚，政治家，開拓相，鉄道相。三高卒。京都府警察部長，三重県知事，内務省警保局長，貴族院勅撰議員をつとめる。後藤新平の知遇をえて，東京市助役，市長となり，震災後の東京復興をてがける。鶴見は，永田がシンガポール軍事政府の最高顧問のときに会っている（再会かもしれない）。→「戦後日本の大衆文化史」

中野重治：小説家。東大独文卒。堀辰雄らと同人雑誌『驢馬』を創刊。東大卒業後，プロレタリア文学運動に加わる。蔵原惟人らと全日本無産者芸術連盟（ナップ）を結成。やがて逮捕，転向。鶴見は戦争中に中野の「空想家とシナリオ」をはじめて読んだ。その後鶴見は中野のよき読書家であった。→「中野重治：自分の中の古い自分」，「中野重治の重層話法」など言及多し。

永松武雄：紙芝居作家。『黄金バット』の二代目作者。三代目が加太こうじである。鶴見は加太の紹介で永松ほか，松井光義，凡天太郎，山川惣治と会ったことがある。→「加太さんの紙芝居哲学」

中村きい子：作家，『女と刀』の作者。この作品は1964年から65年にかけて『思想の科学』に連載された。それ以前に鶴見は谷川雁から中村のことを紹介されている。鶴見が編者だった「日本の百年」でも助けを借りた。→「戦後民主主義の批判の書」

中村武志：小説家・随筆家。法政大高等師範科卒。国鉄本社に勤務し，内田百閒に師事。代表作『目白三平物語』で下積みの都市生活者，サラリーマン層の共感をえた。鶴見とは40年以上の付き合いがある。→「老いの先輩」

中村智子：作家，中央公論社につとめる。著書『横浜事件の人びと』などがある。→「戦時期の本の精神

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

史」,「中村智子著『風流夢譚』事件以後』」

中山 茂：科学史家，東大理学部卒。平凡社勤務を経て，ハーヴァード大学でクーンに学ぶ。手塚治虫の中学時代の同級生であり，手塚を鶴見に紹介している。手塚と共に鶴見との対談（「漫画と記号」）あり。中山茂「不良少年の原点」（『鶴見俊輔集7』月報）参照。

なだいなだ：精神科医，詩人。対談「戦争が宣伝されるとき」がある。

〈に〉

西崎京子：転向研究会，初期からのメンバー。『転向』では「ある農民文学者：島木健作」を執筆。

西村和義：鶴見が京大在職中に知り合う。当時，西村は経済学部四年生だった。破防法反対の集会を故郷鳥取県につくろうとする。この活動に鶴見は同行して，西村から大きな影響を受ける。当時，鳥取県の高校教師だった判沢弘を鶴見は西村から紹介されている。判沢はのちに東京工大の助手となり，転向研究会の重要なメンバーとなる。→「私の地平線の上に」,「梅棹忠夫頌」

〈の〉

野上豊一郎：英文学者，能楽研究家。東大卒，九州大学をへて，法政大学教授，学長，総長。弥生子の夫。鶴見は1939年秋，渡米してきた野上と藤代博士宅で会った。→『鶴見俊輔集1』月報写真参照。

野上弥生子：小説家。1900年，明治初期浪漫派の母胎となった明治女学校に入学。同郷の野上豊一郎（夫）を通じて寺田寅彦，夏目漱石に私淑した。鶴見は1939年秋，渡米してきた野上と藤代博士宅で会った。→『鶴見俊輔集1』月報写真参照。

野間 宏：小説家。京大仏文卒。富士正晴，竹之内静雄と同人誌『三人』を創刊。野間夫人となるのは，富士正晴の妹。46年に書いた「暗い絵」で注目をあびた。『思想の科学』には49年から寄稿している。→『『ヴァイキング』の源流』

〈は〉

萩原延寿：歴史家。アイザイヤ・バーリンがワシントンに滞在中にイギリス外相イーデンに送っていた新聞『ワシントン・デスパッチェーズ』を鶴見に貸与している。→「バーリン」

橋本重三郎：社会学者。鶴見の小学校時代の同級生。→「大衆小説に関する思い出」

橋本峰雄：哲学者，僧侶，元法然院貫首。旧制高校以来桑原武夫に私淑。『文学理論の研究』（1967）では『大菩薩峠』論を書く。「京都へ平連」の結成に参加。『思想の科学』，現代風俗研究会会員，「オーウェル研究会」メンバー。金東希事件の際には，鶴見，和田洋一，岡部伊都子と共に当時の法務大臣田中伊左次を訪ねている。→「共同研究の方法」,「私の地平線の上に」

ハシント，A. Z：ミチョアカン大学院大学教授。鶴見がエル・コレヒオ・デ・メヒコ大学で講義をしたときの学生。西田哲学を研究するために来日し，鶴見と再会している。「メキシコでの鶴見先生」（『鶴見俊輔集5』月報）参照。

ハスエート藤代素子：出版社顧問。鶴見がハーヴァード時代にケンブリッジに住んでいた。素子の母が「通りをふらふらしている風変わりな日本人」であった鶴見を家まで連れてきて，以後しばしば鶴見は素子の家を訪ねることになる。当時，藤代宅はケンブリッジの日本人社会では中心的存在であったらしく，野上夫妻の歓迎会もここで行われたし，またエリサーエフを迎えてのパーティもここで行われた。鶴見はどちらのパーティにも参加している。交換船で帰国の際も同船していた。帰国後，鶴見祐輔の紹介で「英書の図書館をオルガナイズする仕事」を手配される。ハスエート藤代「半世紀をふりかえって」（『鶴見俊輔集3』月報）参照。

長谷川如是閑★：ジャーナリスト，評論家。近代主義的な長谷川の発想は鶴見とはソリが合わないようだ。ここで注目しておきたいことは，長谷川の盟友が丸山幹治（ジャーナリスト）であり，その子が丸山真男だということである。→「太夫才蔵伝」,「コミュニケーション史へのおぼえがき」など。

パーソンズ, T: アメリカの社会学者。ハーヴァード大学教授。鶴見はパーソンズの講義を聴いている。→『期待と回想』

花田清輝: 作家, 評論家。京大英文科中退。代表作『復興期の精神』がある。鶴見は1947年, 二十世紀研究所が開いた花田の講演会を聞きに行った。これが最初の出会いである。→「花田清輝」, 「ある老い方」など。

埴谷雄高: 小説家。鶴見がはじめて埴谷を読んだのは, 46年正月, 雑誌『近代文化』の創刊号に掲載された「死霊」の冒頭部分。その後鶴見は, 「虚無主義の形成」(『転向』)のなかで埴谷の転向についてくわしく分析している。しかし埴谷とはじめて会ったのは76年, 竹内好を病院に見舞ったときだった。対談「『死霊』は宇宙人へのメッセージ」がある。→『転向』

林 達夫: 評論家, 歴史家, 編集者。外交官の父につれられて4年間シアトルで過ごす。京大哲学科卒。おおくの大学で教え, おおくの翻訳をし, また中央公論社出版局長, 平凡社『世界大百科事典』編集長をつとめた。『思想の科学』との関係ははやく, 46年の第三号でラッセルの合評会に参加している。

原 寛: 植物分類学者。東大卒。太平洋戦争中は国立資源科学研究所の所員。後に東大教授。昭和天皇の生物学研究を支える学者グループの一員として活躍。鶴見は1939年秋, 渡米してきた野上豊一郎・弥生子夫妻の歓迎会が藤代博士宅で行われたとき原と会っている。→『鶴見俊輔集1』月報写真参照。

針生一郎: 美術評論家。安保闘争で共産党を批判して除名。鶴見は金芝河逮捕に際して, キム・タルス(金達寿), リ・ジンヒ(李進熙), 針生とともに断食をして抗議している。→「私の地平線の上に」

判沢 弘: 判沢の鳥取県の高校教師時代に西村和義から紹介される。東京工大助手時代に転向研究会に参加し, 重要なメンバーとなる。第二次「記号の会」にも参加。→「記号の会について」など。

#### 〈ひ〉

日高六郎: 社会学者, 東大社会学科卒。外交官の父として中国の青島に生まれる。戦後を代表する社会学者であり, 思想家である。『思想の科学』との関係は50年代初期からはじまっている。また鶴見には, とりわけサークル問題に関して影響を与えた。ちなみに谷川雁は日高の教え子になる。→「なぜサークルを研究するか」など。

日野原重明: 医師, 京大卒。敗戦時にアメリカ医学の飛躍的な進歩を知った。雑誌『アメリカ医学』主宰。看護学, 終末医療に関する著作がおおい。対談がある。→「老いの発見」

広津和郎: 小説家, 評論家。硯友社の作家広津柳波(→「大正期の文化」)の次男, 作家広津桃子の父。早大卒。トルストイ『戦争と平和』の翻訳, カミュの『異邦人』について中村光夫との論争などがある。また松川事件の判決文批判, 被告支援活動などもおこなった。鶴見とは偶然二度ほど会っている。→司馬遼太郎との対談「『敗戦体験』から遺すもの」

#### 〈ふ〉

フェザーストン・R: 公民権活動家。ジンと同様, ベ平連の招待(小田実の発案)で来日, このとき鶴見と会う。1970年3月9日, 自動車を爆破されて死亡。→「北米体験再考」

福田定良: 哲学者, 法政大卒。大学時代に三木 清, 林 達夫, 谷川徹三であったが, その後かれはむしろふつうの生活者の哲学をめざした。鶴見が「限界芸術」という言葉をはじめて活字にしたのは, 福田定良, 長谷川幸延との対談(1956年)でであった。鶴見は福田のことを「自分の前に行く人というか, 先駆者と思って尊敬している」と語っている。福田によれば, 鶴見は福田の『民衆と演芸』を読んで「ある日, だしぬけに」訪ねてきた, と言う。福田「ふしあわせな影響」(『鶴見俊輔著作集1』月報)参照。著書に『女の哲学』, 『仕事の哲学』などがある。→「日本語と日本文化」, 「戦時から考える」など。

福富節男: 数学者, 東大数学科卒, 元東京農工大教授。北爆に抗議して「ベトナム問題に関する数学者懇話会」(ベト数懇)を結成, ベ平連で活躍。その後もおおくの市民・社会運動にかかわる。著書『デモと自由と好奇心と』

原田：鶴見俊輔の社交資本（中間報告）

富士正晴：小説家，三高時代に，詩人竹内勝太郎を知り師事，野間宏，竹ノ内静雄と同人誌『三人』を創刊，詩や小説を書く。鶴見は昭和24年，桑原武夫の紹介で京大のそばのコーヒー店進々堂で会っている。その後，鶴見は『思想の科学』への挿絵を富士に依頼している。→「コーヒー店から三五年」，『ヴァイキング』の源流

藤田省三：思想家，東大政治学科卒。丸山真男に師事。主著に『天皇制国家の支配原理』がある。鶴見とは，『戦後日本の思想』や『共同研究 転向』を共に著している。→言及多し。

〈へ〉

ベリー，R：哲学者，ハーヴァード大学教授。鶴見の卒業論文の指導教師。『W. ジェイムズ伝』でピューリッツァー賞を受賞，著書『価値の一般理論』→「アメリカ哲学」，「北米体験再考」など。

〈ほ〉

星 一：星製薬創業者。SF作家星新一の父。東京商業（現・一橋大）卒。コロンビア大で学ぶ。帰国後，製薬事業に乗り出し，11年星製薬を創業。台湾の総督であった後藤新平の知遇を得て，台湾産アヘンの払い下げを独占し「製薬王」の異名をとる。政治にも関心を抱き，衆議院議員。戦後初の参院選で全国トップ当選。星製薬商業学校（現・星薬科大）を設立。鶴見は，幼い頃，星が後藤を訪ねてくるのを記憶している。→「現代日本に対する一つの寓話」

星野芳郎：技術評論家，東京工大卒。46年創立の民主主義科学者協会（民科）に当初からかわる。『マイカー』（61年）がベストセラーとなった。鶴見とは『日本人の生き方』という共著がある。→「読書日録」

細入藤太郎：立教大学卒。アメリカ文学・思想研究者。立教大学助手のときに渡米。鶴見は1939年秋，渡米してきた野上豊一郎・弥生子夫妻の歓迎会が藤代博士宅で行われたとき細入と会っている。このとき細入はハーバード大学大学院に在籍していた。→『鶴見俊輔集1』月報写真参照。

細萱秀太郎：農業・フリージャーナリスト，精神文化史研究。信濃毎日新聞社文化部時代に「現代と宗教」という企画に関して鶴見を訪ねる。細萱「人生の文体を学ぶ」（『鶴見俊輔集3』月報）参照。

〈ま〉

前田多聞：文相，内務行政官。東大法学部卒。内務省にはいり，内相秘書官などをへて1923年からILO政府側委員としてジュネーブに駐在。38年ニューヨークの日本文化会館館長。後に新潟県知事，東久邇内閣のときに文相をつとめる。鶴見は，前田がニューヨークの日本文化会館の館長時代に，図書整理のアルバイトをしている。

前田俊彦：哲学者，反権力の活動家。戦前の共産黨員。2.1スト後に離党。『飄颻亭通信』を発行。65年，ベ平連に参加，各地を歩く。また三里塚闘争にも参加し，現地に住んだ。公然とどぶろくの醸造も行った。鶴見は前田を福田定良とともに「日本の日常の言葉から哲学の概念をつくりなおそうとしていた」と評価している。→「すれちがいが」，「日本語と日本文化」

松尾尊充：歴史学者。京大卒。大正デモクラシーの実証的研究で先駆者的位置を占め，民衆史・社会主義運動史に力をそそぐ。対談がある。→対談「中野重治『愛しき者へ』を読む」

真継伸彦：小説家，京大卒。『鶴見俊輔著作集5』に解説を書いている。1972年7月，鶴見は真継，金井和子とともに金芝河に会いに韓国に行く。→「リンチの思想」，「分断」，「私の地平線の上に」

松田道雄：小児科医，アナキズム研究者。京大医学部卒。講和問題では平和問題懇話会のメンバーとなり，また京都ベ平連にも参加した。出会いは，桑原武夫が主宰した京大人文研における文学理論の共同研究会であった。松田「ファンの気持」（『鶴見俊輔著作集4』月報）参照 → 言及多し。

松本健一：評論家。『若き北一輝』でデビュー。また「転向論の基軸とは何か：鶴見理論と吉本理論にふれて」がある。鶴見との最初の出会いについては判らない。しかし台湾と一緒に旅したことがある。谷川雁と一緒に鶴見と対談したこともある。対談「戦後精神のゆくえ」，「台湾の夜」（『鶴見俊輔集2』月報）

参照。

真野さよ：小説家。鶴見は真野の記録小説『黄昏記』を書評している。また身の上相談の回答者としても鶴見は真野に注目している。→「老いへの視野」, 「ことばを求めて」

丸山真男：政治学者、思想史家。東大政治学科卒。父はジャーナリストの丸山幹治。『思想の科学』創刊時のメンバー。鶴見は丸山の『国家学会雑誌』に掲載された論文を読んで『思想の科学』のメンバーになつてもらおうよう姉和子に要請する。こうして鶴見と丸山の関係ははじまった。→言及多し。

〈み〉

水上 勉：小説家。父は宮大工ながら家は貧しく、8歳で寺にあずけられる。立命館大中退。61年『雁の寺』で直木賞。鶴見とは対談がある。対談「ふるさとの華やぎ」

水木しげる：漫画家。鶴見は水木の漫画を好んで取り上げ、論評した。対談がある。→「漫画の戦後思想」, 「戦後日本の大衆文化史」, 「対談：ユートピアはどこに」など。

南 博：社会心理学者。初めて会ったのは、1941年6月17日、ニューヨークのインターナショナルハウスではなかったかと南は言う（『鶴見俊輔著作集4』の月報に収められた「鶴見俊輔一九歳」参照）。当時、南はコーネル大学に在学中であった。鶴見が交換船で帰国したのに対して、南はそのままアメリカに残った。初期『思想の科学』の重要なメンバーであった。→言及多し。

〈む〉

武藤一羊：評論家。破防法反対闘争にかかわり東大を退学。べ平連発足と同時に参加。『英文 AMPO』を創刊。これがアジア太平洋資料センター（PARC）となった。アジアの運動家で PARC とムトーの存在をしらぬ人はいないと言われる。父が、キリスト教事業家の武藤富雄である。

村谷荘平：乙骨淑子の父。鶴見は1945年海軍軍司令部（慶応大学日吉学舎内）の翻訳課で村谷と会っている。村谷は、「この戦争は負けると思うというようなことを、菌に衣きせずに人前で大声で言う人」だった。→「少年になった父」

村本一生・ひかる兄弟：灯台社メンバー。一生は明石順三とともにその信念を貫いて戦争の終わりまで牢獄にあった。1972年7月、鹿沼を訪ねる。→「明石順三と灯台社」, 「戦時期日本の精神史」

〈も〉

森 毅：数学者、共編著もある。コーヒーいっぱいをあいだにおいて、森との雑談が私の考えをたえず軌道修正させる力となっている、と鶴見は言う。→「即興の音楽をかなでる人」, 『期待と回想』など。

森まゆみ：編集者、エッセイスト。早大卒。出版社勤務をへて、『谷中・根津・千駄木』誌を女性三人で刊行する。このメディアづくりと連動した町づくりにもかかわっている。対談がある。→「子どもたちと地球雑誌を」

森崎和江：作家、評論家。朝鮮に生まれる。谷川雁らと『サークル村』を創刊。鶴見は谷川から森崎を紹介されている。対談「自分の立つ場はあるか」がある。

モリス, C：シカゴ大学の論理実証主義者。鶴見が一年生の時、客員教授としてハーヴァードで「プラグマティズム・ムーヴメント」という講義をしている。鶴見はモリスから大きな影響を受けている。→「アメリカ哲学」, 「デューイ」, 「第七の宗教」など。

〈や〉

矢内原伊作：哲学者、京大哲学科卒。カミュ、サルトルらの実存主義の紹介につとめた。阪大、同志社大をへて、法政大教授。鶴見とは、同志社文学部で同僚となる。鶴見は矢内原の辻まこと研究を評価するとともに、同志社大の機動隊導入に際しての矢内原の姿勢を好意的に評価している。父は、経済学者の矢内原忠雄。→「機動隊導入」

- 矢内原忠雄★：経済学者，クリスチャン。東大卒。内村鑑三の影響をうける。大学時代は新渡戸稲造の影響をうける。鶴見の父祐輔の弟弟子にあたる。新渡戸の後任として東大経済学部の助教授となる。戦後は東大総長。鶴見は『転向』で矢内原について言及しているが、面識があったかどうかは不明。
- 安田 武：評論家，上智大学在学中に学徒出陣。編集者をへて評論活動にはいる。「わだつみの会」の再建に尽力し，常任理事。『思想の科学』に所属し，64～66年会長となる。鶴見との関係は編集者時代からはじまり，転向研究会にも参加する。山田宗睦と鶴見と三人で坊主の会をつづけた。→「戦時からの呼び声」など。
- 安田常雄：電気通信大学教授。『思想の科学』事務局長。天野正子との共編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』がある。安田常雄「初発の接点から」（『鶴見俊輔集2』月報）参照。
- 安場保和☆：後藤新平の岳父。横井小楠門下の熊本藩士から維新後に福島県，愛知県，福岡県の県令や北海道長官などを歴任。→「私の母」
- 柳 宗悦：民芸運動の主宰者。鶴見は小学校時代から柳の宗教哲学思想に触れていた。昭和15年に手紙を書いて直接会いに行っている。柳を通じてジェイムズを知る。鶴見の「限界芸術論」には明らかに柳の影響がある。→『柳宗悦』など。
- 梁田 貞：府立高等学校尋常科のときの音学の先生。「どんぐりころころ」，「城ヶ島の雨」の作曲家。→「私の地平線の上に」
- 山鹿泰治：アナキズム運動家。鶴見は一度だけ山鹿に会った。それは石川三四郎の葬儀の席だった。→「山鹿泰治のこと」
- 山田慶児：中国化学史研究者，京大卒。国際日本文化研究センター教授。鶴見の同志社時代，山田は工学部の助教授だった。「オーウェル研究会」メンバー。
- 山田宗睦：哲学者，京大卒，関東学院大教授。東大出版会の編集者をつとめ，『戦後思想史』（59年）を書く。この頃から鶴見との関係はふかまる。62～63年『思想の科学』の編集に参加。62年から鶴見，安田武と「坊主の会」をつくり，毎年8月15日に坊主になった。「わだつみ会」，べ平連などで協力。→「ある同時代人の肖像」，「死んだ象徴」など。
- 山領健二：転向研究会，初期からのメンバー。『転向』では「日本浪漫派：亀井勝一郎」，「ある自由主義ジャーナリスト：長谷川如是閑」を執筆。『転向の時代と知識人』（三一書房，1978）がある。
- 山本 明：同志社大学教授，マスコミュニケーション研究。同志社大学教授，マスコミュニケーション研究。鶴見とともに，和田洋一の記念論文集『抵抗と持続』を編集している。
- ヤング一家：鶴見がハーバード時代に過ごした下宿の家族。もともと鶴見は一人下宿で過ごしていた。これがヤング一家に引っ越してくるきっかけは，父親祐輔が，息子が友人もなく満足に食事もとっていないことを聞き知って，ミドルセックス校の校長ウィンザーに暮らしやすい環境を探して欲しいと依頼したからだった。同居したのは，長男ケネス，次男チャールズ，長女ナンシー，ヤング夫人，その母のハント夫人。次男のチャールズがミドルセックス時代の同級生。長男のケネスは後に国務省極東局長，タイ米国外使を務めた。ヤング夫人は，鶴見がカナダで客員教授をしているときにカナダまで出向いて再会している。C. ヤング「兄弟にして友なる俊輔」（『鶴見俊輔集11』月報）参照。→「ヤングさんのこと」，「下宿の小母さん」

〈よ〉

- 横山貞子：鶴見夫人，京都精華大学教員。京大在職中に鬱病に罹ったときに，鶴見は東京の金町に下宿した。横山はその家の娘。掛川恭子の項参照。掛川「金町と俊輔さん」（『鶴見俊輔集3』月報）参照。
- 吉川勇一：市民運動家。東大を退学処分。べ平連に参加。66年から74年の解散時まで事務局長役をつとめる。べ平連にとって吉川の尽力は大きかった。鶴見とは論争もある。吉川『市民運動の宿題』
- 吉田 満：元日本銀行監事，『戦艦大和ノ最期』の作者。「軍人の転向」（『転向』）でくわしく取り上げている。その取り上げ方は単に「軍人の転向」に焦点をあてたものではなく，軍隊組織と戦後の企業組織の類

似性を見て、現代人の「転向」の意義を提起している。「私が生涯に会った驚くべき人物の一人」（「戦時から考える」と鶴見は言っている。対談『「戦後」が失ったもの』がある。→『転向』など。

吉本隆明：思想家、詩人。東京工大卒。戦後を代表する評論家、思想家。鶴見との間にはいくつかの論争、対談がある。吉本「自立の思想的拠点」、「ナショナリズム」→言及多し。

〈ら〉

ライシャワー、E：元日本大使。鶴見との最初の出会いは、鶴見がハーヴァードでライシャワーから日本語を習ったときだった。その後、1948年、ライシャワーはアメリカの教育使節団のメンバーとして来日、この時鶴見は京大側の通訳（囑託講師）として再会している。その後もいくつかの会議で同席している。→「はっきりしたのはいいことだ」、「絵葉書の余白に」など。

ラッセル、B：哲学者、数学者、評論家。鶴見はハーヴァードでラッセルの講義を聴いている。→『期待と回想』

ラーナー、M：30年代アメリカの論壇で活躍した思想家。鶴見はヤング一家のパーティでラーナーに会っている。→「ヤングさんのこと」

ラミス、D：政治思想家。カリフォルニア大卒、津田塾大教授。米海兵隊員として初来日。69年、外国人ベ平連を結成する。→「私の地平線の上に」

〈り〉

リーヴィー、M：プリンストン大学社会学教授。鶴見が留学時代に大学院の学生で日本語を教えている。リーヴィーが来日して再会している。→「日本思想の可能性」

リ・ジンヒ(李進熙)：考古学者。1946年来日、明治大学卒。雑誌『季刊三千里』の編集長。鶴見はりの「李朝の美と柳宗悦」を評価している。また鶴見は金芝河逮捕に際して、キム・タルス(金達寿)、針生一郎とともに断食をして抗議している。→「私の地平線の上に」

〈ろ〉

蠟山政道★：行政学・政治学者、東大法学部卒。東大教授。学生時代から吉野作造に私淑し、東大新人会、昭和研究会に参加。戦後、中央公論社副社長兼雑誌『中央公論』主幹となった。嶋中鵬二の岳父である。鶴見は、『転向』で蠟山について論じている。→「転向」、「中村智子著『風流夢譚』事件以後」

〈わ〉

若槻礼次郎：政治家。1912年第三次桂内閣で蔵相、以後内相などをつとめる。護憲三派内閣時の内相として普通選挙法を成立させると同時に、治安維持法を制定する。後藤新平と同世代の政治家である。戦後、鶴見は若槻を訪ねている。→「戦時から考える」

和田周作：元レバノン大使、ポルトガル大使。鶴見より7歳年長で、中学時代柳宗悦のことを鶴見に教えたのが和田だった。→『期待と回想』

和田洋一：同志社大学教授。『戦時下抵抗の研究1・2』（みすず書房）の執筆代表者。中井正一が中心となって発行した『世界文化』のメンバー。鶴見を同志社大学へ招聘した人物である（和田「鶴見さんと同志社と京都」、『鶴見俊輔著作集5』月報）。鶴見は和田から『世界文化』時代の中井のことを聞いている。金東希事件の際も和田の助力をえた。→「私の地平線の上に」

渡辺 慧：物理学者、東大理学部卒。フランスではド・ブローイに、次いでドイツではハイゼンベルクに学ぶ。清水幾太郎とともに二十世紀研究所を設立。『思想の科学』創刊時のメンバーである。

1998年9月28日 受理